

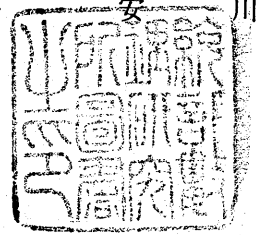
T 02
N 69
2

# 日本における統計学の発展

## 第 2 卷

話 し 手 寺 尾 琢 磨

聞 き 手 女 川 正 彬



1980年10月20日(月)

1980年11月10日(月)

1980年11月17日(月)

慶応義塾大学にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。  
江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀦信邦\*、森博美\*、山元周行 (\* 推進係)
- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

安川 昭和6年に日本統計学会が創立されてから、来年は昭和56年になりますので、日本統計学会50周年記念になる。そこで、その記念事業の中に、統計学会の草創期の話とか、日本における統計発達前史という話を長老の先生方にいろいろ伺っておきたいということも、実はこの記念の事業の中に入っておりますので、きょうは、慶応義塾大学の名誉教授の寺尾琢磨先生を煩わしまして、統計発達前史の方に関係いたします、慶応義塾に統計学はどういうふうに入ってきたのかというようなところを中心にお話しただけたらと思います。

インタビューいたします私は、先生の門下生で、現在義塾の教授をしております安川正彬でございます。ひとつ先生、肩張らないで結構でございますので、いろいろお話を伺わせていただきたいと思いますと思っております。

寺尾 慶応義塾の歴史を振り返ってみる場合に、特に統計学という見地から考えてみますと、やはり幾つかの時代に分けてみなくちゃならぬと思うのです。

一番大きくは2つに分けられる。それは、明治23年に塾が大学部を設けて、要するに、それ以来学校らしい学校になった。それ以前というものはいわゆる福沢塾であって、その時代とそれ以後とは全然趣きが違うので、まず大きくそう2つに分けられる。

続いて分けると、大学部ができてから後、いわゆる新制大学令によって本当の大学になった。これは大正9年ですけれども、それまでの時代、いわゆる理財料の時代と、それからそれ以後と分けられると思うのです。きょうはまず、一番初めの福沢塾の時代のことをお話しして

みたいと思います。

いうまでもなく——どうも、福沢とか、福沢諭吉とか、ただ諭吉とか、呼び捨てにする癖がないものだから、すぐ「先生」といってしまうのですが、ここでは大いに勇を鼓して……。

安川 歴史上の人物という意味で。

寺尾 昔のキリシタンの信者が踏み絵をするようなつもりで、「福沢」といっておきます。

福沢という人はいうまでもなく、西洋文明の導入者としての第一人者だったといっていると思うのですが、まことに手当たり次第に新しいことを何でも持ってきた人で、明治17年に、福沢はこんなことをいっているのです。

「西洋文明の事と在らば、学問に技芸に商賣に教育に、およそ我が眼中に映写したる事物は、口に、筆に、これを人に伝えまた傳えて、かつて怠らざること三十余年」

などと豪語している。何でも目につくと皆それを取り入れて、しゃべったり文章にしたりしたんですね。

統計学に関することも、ごくわずかながらそこにあるのです。先生は、別に統計学そのものを主題として翻訳をしたり、本を書いたり、論文を書いたりしたことはないのですけれども、数ある著作の中に統計に触れたことがある。いまそれをひとつ考えてみたいと思うのです。

福沢諭吉という人は、もともと非常に数学に関心を持っていて人で、至るところで、数とか数学を大事にしろということ強調している。「啓蒙手習之文」という、これは明治4年に出した本があるのです。子供に、こういうことを勉強しろということをお教えたものですが、

その中に数学のことが書いてある。

「数を知らざれば博学多才の大先生と雖も實地に當て用を為さず、實用を為さざる学者は僂人に異ならず。開花の世には無用の長物と云う可し。凡そ百科の學術、天文測量、地理航海、器械製造、商賣會計盡く皆数学の関る所なり。此学單なる者は」

——「單なる者」というんだから、單純の單の字で、あまりよく知らない者という意味だろうと思うのですが、

「單なる者は指を屈して物の数を計るを初とす。故に数学を知らざる者は指なき人の如し。」

同じようなことが、いろいろな本に出ています。もともと、こんなものに興味があった以上は、その当時の西洋の新しい文明の中の数に関する学問について、興味を起さなかつたはずはないと思う。したがって、そのころ「スタケスチック」といった統計に関して、おそらく初めから関心を持っていたと思うのですが、よく調べてみますと、早いも早いもおそらく日本で一番早く統計なるものに手をつけたのは先生じゃないかと思うのです。これは安政6年、福沢が初めて塾を江戸につくって、いままでのオランダ語を捨てて、今度は英語を勉強し始めた、その年です。だから、塾を始めた翌年、ある伝手があったものだから、例のアメリカ使節団にくっついてアメリカに行ったわけですね。咸臨丸に乗っていったのがそのときですね。

その行くときに1つ翻訳をやっていた。これが途中だったものだから、そのあとを弟子の岡本周藏に、「あと、おまえがやれ」といってアメリカに行ってしまったのです。約半年ばかりで帰ってきたわけですが、その間にそ

の翻訳ができたわけだ。

帰ってきたときは、例の万延元年になっている。万延元年にその本が出た。これは「万国政表」と名づけてある。もちろん「政表」という字を使ったのは、これが初めてらしい。その本の題を、福沢が考えたのか、あるいは岡本が考えたのか、どうもそこがはっきりしないのですが、本ができたときには、これは岡本の名前で出している。福沢諭吉の名前はそこには出ていない。ですから、福沢の著作とはいえないんだけど、しかし、それに手をつけたのは明らかに福沢諭吉だったのです。

安川 いまいわれたのは、翻訳の本でございませうか。

寺尾 翻訳なんです。オランダの翻訳で、「万国政表」が万延元年に出たのですが、あのころは本は、一々届けを出して許可をもらわないと出版ができなかったのです。それで出版願が残っている。「万国政表」自1840年至1854年一冊」こう書いてある。そうしておいて文句が、

「右は原本和蘭フ・ア・テ・ヨンの著述にて、安藝浪人岡本節藏と申す者翻訳に候處、同人より譲受、此度開版仕、同志の者へ與へ度候間、此段奉伺候。以上」として「庚申9月15日」、万延元年、1860年ですね。「奥平大膳大夫家来 福沢諭吉」と書いてある。

安川 あて名はどこなんですか。

寺尾 あて名は政府だ。もちろん出版願だから。

安川 政府といってもまだ、1860年のころですからね。

寺尾 それは書いてないんだ。

したがって、これは願を出したのは福沢だけでも、本当にここにも書いてあるとおり、「安藝浪人岡本節藏と申す者翻訳に候處」と書いてある。いずれにしてもこれが

スタティスティックを「政表」と訳した最初のものらしいんだ。

安川 よくスタティスティックをどう訳すかで、「統計」という言葉に落ちつくまでには、いろいろ紆余曲折があったということを知りますが、「政表」というのも、もちろん出てくるのですが……。

寺尾 間もなく出てきた杉亨<sup>ウツヒ</sup>ニ、あれは頑固に「スタチスチック」とかなでやっていた。「統計」というのは、合計という意味で長いこと使われてきたものだから、杉亨ニは非常にそれをきらったわけだ。妙な字をこしらえて、それもスタチスチックと呼ぶような字をこしらえたわけで、あくまでスタチスチックで通したわけですね。明治19年の何かに、スタチスチックをやむを得ず「統計」と改めた。

しかし、明治政府は明治の初めから「統計」という字を使っていた。明治4年に初めて、日本政府の中に統計の部ができるわけですからね。あのころの大蔵省の中に、統計司といったかな、そんなものができて、「統計」という字をちゃんと使っているのです。

一般にはむしろ「政表」といったらしいのですが、それを一番初めに使ったのがこの本（「万国政表」）らしい。したがって、この場合には岡本節藏が統計の大変な関係者だ。

安川 岡本周藏ですね。

寺尾 そう。岡本周藏に関する研究はかなりあるんですよ。これは、君は知らないかもしれないけれども、大変おもしろいんで、必ずしも筆記なんかしなくてもいいけれども、話してみるとこんなことなんだ。

福沢先生が江戸へ来て、塾を開くについて命令が来るわけだ。そのときに先生は、大阪の例の緒方塾にいたんだけど、そこに命令が来て、江戸へ来いという。先生が25歳のときですわね。そのときに旅費として、家来一人分のお金をもらった。先生はそんなもの、自分は家来なんか雇う身分じゃないからといって、別に家来は雇わなかったけれども、せ、かくカネがあるから、緒方塾で「だれか江戸へ行きたいやつはないか、行くなら連れていってやる」、そういったら、手を挙げて「私を連れていってくれ」といったのが、岡本周藏なんです。

それで、それを連れて江戸へ上ってきた。ただし、そのときに、どうせオレも貧乏人だから、おまえは飯炊きもやらなくちゃいかぬぞといって、例の鉄砲洲の長屋へ入るわけです。そうして、福沢、岡本2人がそこで一緒に自炊生活をやるんだ。

ところが、岡本は大変よくできる。特に数学ができた。ううだ。間もなくその生徒のお頭、級長というの、塾頭になった。

それで今度は、福沢がアメリカに行くについて、やりかけの本の翻訳を押しつけられたばかりでなく、この間の留守番を先生のかわりにやらせられたわけだ。

後で、大変できるものだから、福沢がこれを幕府に推薦する。ところが、これは身分が悪いんですよ。本当の侍でなくて、庄屋の息子だった。それがたまたま、一向に取り上げてくれないものだから、福沢は大いに腹を立てて、それを古川という幕臣のところに養子にやった。それ以来は古川周藏という名前になる。

そうすると、本人は大変できるものだから、幕府の海



軍に入って、長崎丸という軍艦の艦長になっちゃう。そうして、例の榎本武揚の艦隊に入る。そして、大変これが気の強い男で、幕府が瓦解したときに、幕府の海軍をどうするかで大変迷ったわけです。そのとき主戦論を唱えて、真っ先に出港した。そして榎本武揚もしようがない、それに引きずられるようにして出て、北海道へ行った。だから、なかなか勇敢な男だったらしい。

そこで仙台藩の軍艦を乗って、その艦長になるんだな。ところが、宮古沖の海戦で負けるんです。負けて、船から逃げ出して陸へ上がってうろろしているところをつかまっちゃう。その前に、軍艦で逃げる前に福沢先生に会って、「自分はこうする」といったら、「そんなばかなことをするやつがあるか、オレ知らないぞ」といって大変怒られるんだ。それを振り切っていっちゃった。それで本人はふんづかまって、江戸で監禁されちゃう。

そこへ福沢先生が訪ねていって、ほれ見たことかと大いに怒るわけだ。怒ったけれども、いろいろめんどろを見てやって、その後それは放免になる。そうすると、また福沢がこれを明治政府に推薦してやって、それがまた明治政府の海軍に入って、海軍学校の先生のようなことをやる。その後、明治何年かな、オーストリアで万国博があったとき、日本の代表団について向こうへ行って活躍をしたとか、いろいろなことをしたらしいんですよ。それで間もなくクリスチャンになったり、最後は盲学校を計画する。これは日本でそういう心身障害者のためにそんなことをやろうといったのは、おそらく初めてじゃないかといわれているんだ。ところが、実際に盲学校はできるんだけれども、できる前に、本人は明治10年に病氣

で死んじゃうのです。

これは、私が学生のときの塾の統計の先生の横山先生が大変興味を持って、わざわざ広島県まで出かけていて調べたんです。そしていろいろなことがわかった。横山先生は、統計の恩人だという意味で興味を持ったわけで、それが福沢先生の薫陶の子分だったということが大変奇縁だと思うのです。

これが福沢先生の仕事とすれば、福沢先生は一番早く政表をつくった人だということになるんだけど、そこも、どちらがその題をつけたのかわからないのです。とにかく「イヤブック」のようなものをまとめたんだと思うのです。だから、理屈は何も書いてなくて、一種の国尽くしのようなものだったと思うのですが、こんな本は探せばどこかにあると思うのです。

安川 なるほどね。調べてみましょう。

寺尾 初めて統計に関して福沢の名前が出てくるのは、それですね。

それで、その後もしばらくの間は、「統計」という字は福沢の本の中には出てこないのですよ。ただ、いかにも先生は数学的なことが好きだったものだから、ご承知のとおり、その間に簿記の本……。

安川 「張合之法」ですね。

寺尾 「張合之法」。あれは翻訳ですね。あんなものを出したり、いまいった「啓蒙手習之文」を書いたりしてやっていたわけだな。

その次に、今度は本式にスタティスティックが出てくるんだ。これは例の「文明論之概略」の中に、かなり詳しく出ているんです。

「文明論之概略」は明治8年に出た、先生のこれはおそらく一番の代表作じゃないのかな。この中にトーマス・バックルを紹介しているのです。いうまでもなく、トーマス・バックルというのはケトリーの弟子で、あのころ統計的なスタビリティというか、統計的な結論というものは非常に安定性がある。たとえば、毎年起こる犯罪の数は一定しているとか、したがって、監獄の設備も一定していてよろしいとか、毎年の自殺の数もほとんど同じだ、しかも使う道具、手段までが毎年ほとんど同じだ、ケトリーがそんなことをいったのが、今度は一般に、いわゆる「定命論」に転化していくんだな。結局、人間の自由意思というものがあるかどうかという問題になってしまったわけだ。それを歴史に応用したのがトーマス・バックルです。トーマス・バックルの本は、日本に非常に大きな影響を与えたい。それをかなり詳しく紹介している。前の方は長いから省略してしまっ、

「英人『ボックル』氏（バックルをボックルと読んでいます）——英人『ボックル』氏の英國文明史（例の「History of Civilization of England」）に云く、一國の人心を一體と爲して之を見れば其働に定則あること實に驚くに堪たり、犯罪は人の心の働なり、一人の身に就てこれを見れば固より其働に規則ある可らずと雖ども、其國の事情に異變あるに非ざれば罪人の數は毎年異なることなし、譬へば人を殺害する者の如きは多くは一時の怒に乗ずるものなれば、一人の身に於て誰か預めこれを期し、來年の何月何日に何人を殺さんと自から思慮する者あらんや、然るに佛蘭西全國にて人を殺したる罪人を計るに、其數毎年同様なる

のみならず、其殺害に用ひたる器の種類までも毎年異なることなし、尚これよりも不思議なるは自殺する者なり、抑も自殺の事柄たるや、他より命ず可きに非ず、勸む可きに非ず、欺てこれに導く可らず、劫してこれを強ゆ可らず、正に一心の決する所に出るものなれば、其數に規則あらんとは思ふ可らず、然るに1846年より50年に至るまで、毎年龍動に於て自殺する者の數、多きは266人、少なきは213人にして、平均240人を定りの數とせりと。以上『ボックル』氏の論なり。」

このことから、結局、歴史を動かすものは個々の人間の意思ではなくて、何か大きな、そのときの時の勢い、大きなマクロ的なものが背後にあって、これで歴史というものは動いていくんだということをおいたわけですね。そんなことをずっと書いていて、

「故に天下の形勢は一物一事に就て臆断す可きものに非ず。必ずしも廣く事物の働を見て一般の實跡に顯はるゝ所を察し、此と彼とを比較するに非ざれば眞の情實を明にするに足らず。斯の如く廣く實際に就て詮索するの法を、西洋の語にて『スタチステク』と名く。ここに、「スタチステク」という言葉が出てくるのです。

「此法は人間の事業を察して其利害得失を明にするため缺く可らざるものにて、近來西洋の學者は専ら此法を用ひて事物の探索に所得多しと云ふ。凡そ土地人民の多少、物價賃錢の高低、婚する者、生るゝ者、病に罹る者、死する者等、一々其數を記して表を作り、此彼相比较するときは、世間の事情、これを探るに由なきものも、一目して瞭然たることあり。(中略) 日本には未だ『スタチステク』の表を作る者あらざれば之を

知る可らずと雖ども、婚姻の數は必ず米麥の價に従ふことなる可し。」云々。

そんなことが書いてあって、とにかくここでスタチスチックというものが出てくるのですよ。これは比較的、バックルのいっているところの急所はちゃんととらえているわけで、尤く大量観察をやらなければいかぬということ、そういう方法があるということを紹介したわけですね。

福沢くらしい統計を利用した人はないと思う。たとえば明治10年の西南戦争で、紙幣が乱発されて物価が非常に騰貴した。それで「通貨論」という本を書いているんです。ところが、この本を書くのに大変苦勞をするんだ。大蔵省、そのときには例の大隈侯が大蔵卿だったんだけど、大蔵卿に頼んで、大蔵省へ出かけて行って実際の通貨を見学するんですよ。さらにまた大隈侯に手紙を出して、この間は見せてもらってありがとう。しかし、ただ実物を見ただけではよくわからぬから、大蔵省にある通貨に関するいろいろな資料を見せてくれ、貸してくれという申し込みをやるのです。それで、これを大隈侯が承知して、それを手に入れて、そんなものを資料にして書いたんだ。

しかし、もっとおもしろいのは、杉亨二に、日本及びドイツ、アメリカ、フランスの通貨の状態を知らせてくれという依頼状を出しているんです。明治10年7月2日付の手紙なんですが、初めに時候のあいさつがあって、  
「陳ば毎々御面倒の義質問申上恐入候得共、左の一條御調奉願度、御答も被成下候はゞ難有仕合奉存候。  
一)才今日本国中現に通用する貨幣、紙幣、銀行札、並

に金銀銅貨を合して大凡何凡なるや。

(二)方今英国にて現に通用するもの、同断、何程なるや。

(三)同断、亜国佛国は如何。

右は極精密を要するに非ず、大凡の處御調奉願候  
頓首

七月二日

杉先生侍史

こういう手紙が残っているのです。

それから間もなく、例の「通貨論」という本が出たわけですが、杉さんが、これに答えて、実際に統計を提供したというおれはないのです。しかし、「通貨論」の中には、これが非常に詳しく出ている。日本のも英国のも、アメリカ、フランス、これが非常に事細かく出ているところを見ると、杉亨二からの資料の提供があったんだろうと思われのです。

「通貨論」は、インフレに関する議論としても非常におもしろいけれども、福沢という人が一つ物を書く場合に、どんなに資料収集に苦勞したか、入念だったかという、一つのいい証拠になると思うのです。

そのほか、いろいろの当時福沢の書いたものを見ると、やたらと数字が出てくるのです。あれほど数字をたくさん使った人は、そう見当たらないと思う。私が考えるのに福沢という人は、統計というものは政府がつくるもので、一般の人間はただそれを利用するもの、こう考えていた。だから、もう一つの統計学というものは、そのころは非常に幼稚なもので、統計の数字の分析というようなことはやらなかった。ただ、一つの数字の資料であって、それだけで終わっているんだな。特別にこれを

学問として先生は尊重しなかったんじゃないかという気がするんだ。それで、むしろ統計をつくるのは、統計に関する官吏を養成すること、すでに明治政府には統計の官庁ができたわけですが、そこへ統計をつくる人として入れたらいいんじゃないか。自分たちは、ただそこがっくってくれる統計を利用すればいい、こういうふうにかえたんじゃないかと思うのです。

それは明治7年だったと思うが、初めて大隈さんに会うんですよ。ある紳士や学者の集まりで、大隈さんに紹介されるわけだ。大隈さんは大蔵大臣で、間もなく例の統計院の総裁になる人だ。その大隈さんに会ったときに、その席で伊藤博文、井上馨に紹介されるんですよ。そこで、福沢、大隈、伊藤、井上、この4人が顔を合わせたわけだ。これが後の、例の明治14年の政変のメンバーです。

安川 伊藤が一番急先鋒で大隈を野に下らせたわけですね。

寺尾 そのときに初めて顔を合わせたんだけど、福沢は大隈と大変懇意になって、そのときすぐに、自分の門弟の中の優秀なやつを4人あなたに預けるから、どうぞ使ってやってくださいといって差し出すわけだ。それが、矢野文雄、小泉信吉、尾崎行雄（後の号堂）、犬養毅。この4人を大隈さんに預けちゃう。それから間もなく、政府の太政官の中に統計院ができる。その統計院の総裁に大隈さんが就任して、こんな連中がその子分になっちゃっているんだ。

明治14年の政変のときには、これが大隈の子分だというので、みんな免職になっちゃう。それで、この騒ぎは

慶応にとっては大変な事件なんだけれども、統計学の上からいっても、この4人はとにかく統計のかなり上の方の官吏になっていたわけだ。

結局、あの事件以来、福沢も政府の仕事から手を引く。大隈は大隈で、それなり野に下って、あは立憲改進黨をつくる。そして翌年、東京専門学校（早稲田大学の前身）をつくらせて、これもいままでは参議だったわけだけれども、そんな地位を退いて、子弟の教育に熱中するようになったわけだ。

せっかく統計のかなり上の方の役人になった連中がおっぽり出されてしまったものだから、いわゆる統計をつくる側からは、慶応というものはそれから縁がなくなってしまうわけだ。

安川 福沢先生は、大隈重信が早稲田大学をつくったときに、相当力を注いでおるわけですね。

寺尾 開校式にちゃんと、小幡篤次郎を連れて出席していますよ。早稲田だけじゃないんだ。一橋ができたときにも、あの前身は何といったか、法律学校といったか。

安川 設立趣意書というものを福沢先生が書いているとかいう……？

寺尾 そうなんです。それができたときに、大変よろしいといって、設立趣意書、寄付金募集のことまでも何かやったという話があるんだけれども、とにかく設立趣意書は確かに福沢が書いているんですね。

さて、何かとんちんかんな話をしてしまったが、直接福沢が統計というものに首を突っ込んだのは、そんなときです。それから後、例の杉享二とのいろいろな関係があるわけだから、それをひとつ……。



安川 普通はこれキョージと読むのですけれども、コージですか。

寺尾 コージと読むのです。

日本の近代的な統計学の開祖は、杉亨ニです。この杉という人と福沢という人は、大変縁があるのですよ。福沢が初めて江戸へ召されて塾を開いた。なぜ福沢が選ばれたかということですが、あのころ江戸の屋敷に、岡見(彦曹)という有名な侍がいて、これが大変オランダ語が好きだった。そのころオランダ語は、主に医学とか、あるいは戦争に関する事、特に砲術の勉強のために蘭学というものが許された。福沢という人も、砲術の研究という名目でオランダ語の勉強をやったんです。そうでなければ、藩から許可がおりなかった。その岡見という人も、したがって、砲術に大いに関心を持っていたわけです。関心といっても、そのときは例のペルリがやってきて、日本じゅうが騒然となっている時代ですから、軍備ということが大変に大きな問題だったのです。

それで、佐久間象山、この人は蘭学と砲術の大家ですね。佐久間象山に江戸の屋敷に始終来てもらって、そこで勉強をさせていたんだ。そうしたら、佐久間象山は幕府からにらまれてつかまって、信州へ幽閉されてしまう。それでお屋敷に来られなくなった。

そこで、そのかわりの蘭学の先生に、松本弘安と杉亨ニを雇ったんです。ところが、間もなく2人ともそこをやめてしまう。杉亨ニはけんかするの、何か気に入らないことが起こって飛び出してって、勝安房(勝海舟)のところに逃げ込んでしまう。そして勝安房のところに

小さな塾があって、その塾の親方、塾頭になってしまう。そこで、どうしても後がまを探さなければならぬ。自分の藩に、福沢という大変よくできる男がいるから、何も他国のものを雇っておく必要はあるまい、福沢を呼ぶということになったわけだ。それで福沢が召し出されるわけで、さっきいったように、そのときに岡本周藏をお供に連れてやってきたわけですね。

したがって、杉亨二は、中津藩の自分の先任者だな。しかもこれは、福沢と同じ緒方塾で勉強した人ですから、先輩でもあるわけです。そういう縁がもともとあって、後では明治6年に、例の明六社なるものができたときに、早速、杉亨二は選ばれて会員になっているのです。明六社はもちろん、福沢が首謀者でできたものですね。そしてそのときの会員になって、しかもそのときに津田真道、西周の2人も選ばれている。ごくわずかのメンバーなのに、その中に杉亨二と津田真道、西周の3人がいたんです。その津田真道と西周が、日本へ統計学を導入した最初の人だと、普通はいわれるんです。

これはオランダのバイエン (Bayern) という大学へ留学するのです。そして、そこでフィセリングという教授について旧式の統計学の勉強をした、いわゆる国家学としての統計学を勉強した。そして講義案のようなものをもらって帰ってくる。これが時期的にはかなり古いんですよ。津田真道と西周が日本へ帰ってきたのは文久3年 (1863年) ですから、福沢が塾を開いたのは1858年で、塾を開いて5年たったときに帰ってきている。さっきいった「万国政表」は1860年ですから、この津田、西が帰ってくるよりも前ですね。

宇川 3年前ということですね。

寺尾 非常に古いんですよ。この津田真道が向こうで聞いた講義を、明治7年(1874年)に「表紀提要」という題の本にするのです。これが普通、統計学を日本へ紹介した最初の本だといわれているのです。けれども、これは旧式の統計学、国勢学としての統計学であった。

杉亨二は、この津田真道や西周が帰ってきたときに、初めて統計の話聞いたらしい。そして間もなく、ハウスポーターという人の“Lehr- und Handbuch der Statistik”という本を手に入れた。これは1872年に出た本だから、出て2~3年目には日本へ来たわけですね。これを手に入れた。それで本式に勉強して、統計学の本当の意味の開祖になったわけだ。

だから、統計というものをただ表をつくるという意味に解釈すれば、これは福沢の方がかなり古かったといえるのですが、この杉亨二はそんなわけで、明治7~8年ごろから——その前から政府の統計院の重要な人物になっていて、実際にはもう統計の仕事をずっとやっていたわけだ。その杉亨二は、いまいったように明六社のメンバーにも推されて、明六社の連中というのは数が少ないものだから、始終会って、いろいろな議論をしていたらしいんですよ。特に、そこには津田真道、西周も入っていますから、始終統計の話は出たんだろうと思うんだ。しかし、明六社は間もなく、数年たって解散しちゃう。これは福沢が解散しちゃうんですよ。要するに、みんな非常に過激派で、自由主義にこり固ったような連中が集まっているから、政府からにらまれるのです。それで、こんなにならまれるようなものなら、もうやめた方がいい

だろーというあれで、とうとうやめちまうんだけれども、とにかく杉と福沢はかなり前からそういう因縁があって、お互いに何かつき合いはしていたらしいのです。そこでさっきいったように、手紙で問い合わせたり、何かそんなことはちよーいちよーいやっていたらしい。

大体明治10年前後に慶応義塾の中で、門下生たちが統計に対する興味を急に起こしちゃった。そして勝手に何か勉強を始めた。いろいろを議論をやっていたんだけど、それを聞いた福沢が、おまえたちだけでやってどうにもなるまいから、ひとつ杉さんのところへ行って相談しろと行って、杉さんのところに差し向けるわけだ。これがそもそものいまの統計協会の濫觴になる。

ここにおもしろいあれがあるんですよ。そのころ杉さんという人は、すでに例のスタテスチック社の前身の表記学社なるものをつくっていたんです。これは明治9年につくっているんです。これが後にスタテスチック社と改名する。そこに福沢の門下生が行って、杉先生に、私たちも統計に興味を持っているが、どうしたらいいでしょうかと、いう相談を持ちかけるわけだ。

杉さんがつくった表記学社というのは、主に統計理論とか、学問的な意味の研究を主眼としたものだ。ところが福沢門下は、やっぱり先生のあれなんだろー……。安川 政表の方ですか。

寺尾 統計がバラバラに発表されるものだから、そういうものを集めた年鑑的なものをつくりたい、こういうので、ちよーと違うのです。それで杉さんも、それはいいだろー、じゃひとつオレも骨を折ってやろーと行って、

ノツ会ができた。それは明治11年(1878年)12月、製表社という会ができた。これには杉先生みずから、親方のような形でそれに入るわけです。

このときに集まったのが約15名で、これが杉亨ニを除くと、ほとんど全部福沢門下なんだ。会員は杉亨ニ、これが親方だ。それから阿部泰蔵、後に明治生命をつくった人ですね。新井金作、宇川盛三郎、吉川泰次郎、日原昌造、高力衛門、森下岩楠、須田辰次郎、猪飼麻次郎、伊藤銓一郎、森島修太郎、浜野定四郎、それから、例の小幡篤次郎、実際は小幡が親方なんです。四屋純三郎、この15名。この中の杉先生以外は全部福沢門下。そして製表社なるものをつくらせて、年表のようなものをつくらうとたくらんだんです。

たまたまその翌年に、例の渡辺洪基の一派が、自分たちも同じような計画を持っているとあって、杉先生のところに出かけていくわけだ。それで、どうしたものかというたら、何だ、それは小幡なんかは今度つくるものと同じじゃないか、それなら別々にやらないで一緒にやったらいいだろう、合同しろ、合同してひとつ会を起したらいいだろうとあって、両方でそれを承知するんですよ。そうして両方が合併してつくれたのが、この東京統計協会です。

安川 この本(「創立100周年記念日本統計協会年譜」)には、日本統計協会と書いてありますが、そのつくれたのは東京統計協会なんですか。

寺尾 この東京統計協会はそのままずっと続くわけですが、杉先生が自分でつくれた、さっきの表記学社は、明治11年にスタケスチック社と名前を変えるのです。それ

てそれがずっと続いて、途中で今度は統計学社と名前を変える。統計学社と東京統計協会と、2つが並んであったわけだ。

それが戦争末期に合同しちまう。そのころぼくは、実はちょっと関係していたんだけど、紙がなくなっ、別々には雑誌が出せないのです。そんなことで、両社が合併して、大日本統計協会というものをつくったんです。これが昭和19年だったと思う。ところが、間もなく戦争に負けて、「大日本」はおかしいだろうというので、「大」を取って日本統計協会になって今日に至っているんです。

安川 この本は、その歴史をまとめたものですか。

寺尾 これは、この間100年祭をやったものだから、そのときに昔の記事をまとめた。これは大変おもしろい。

ところが、これをずっと見ると、この2つの会ができたけれども、共通のメンバーがうんとあるのです。ほとんど共通しているのです。両方とも非常に大きなもので、会員数は500名とか800名とか、1000名を超している場合もあるのです。年によって違いますが、両方とも大変なんです。これは地方の統計関係事務担当者をみんな会員にしちゃっているんで、むやみに会員の数が多いですがね。

上の方に立っている人には、もう共通の人が多い。杉さんなんか、両方の一番の親方です。ただ、慶応とすると、統計協会の方に関係が深いのです。それで、ここにも書いてあるんですが、統計協会の方が裕福で、何かカネの要ることがあると、統計協会の方が出しているらしいんだ。でも、2つの会は非常に仲よく仕事をしてきているんです。

だから、福沢門下生の統計に関する事業という結局、協会、特に統計協会のことになっちゃう。これは次の段階の問題になるんだけど、さっきいったように、官庁の連中は明治14年に、みんな追っ払われたものだから、ここに入っちゃうのです。だから、慶応義塾と統計学の関係と云ったら、統計協会と慶応との関係と云ってもいいんじゃないかと思う。

ただ、その後慶応に大学部ができて、ここで統計の講義をするようになったときの人、これはむしろスタチスチック社の連中の方が多いわけた。

安川 ねこのところはまた第2弾でお話しいただくとして、きょうはもう1時間以上話していただいていますので、むしろ一息入れていただいて、次の機会にまた伺った方がいいんじゃないかと思うのです。

寺尾 何かまとまらぬけれども、雑談式のこんなことばかりが多いんですよ。

安川 いや、しかしこれは、おまえたち調べろと云って調べるのが大変で、半生を使わなければとて……。

寺尾 何かあやしいところをひとつ質問してくださいよ。

安川 というか、むしろこういうお話を伺っていると、なるほど「スタチスチック」という文字を「製表」と訳しておいた時代と、「統計」と訳さなければならなくなっただということはいくわかりますね。単に表をつくらせてやるんじゃないで、学問的な問題に入る場合にはまさに「製表」じゃ適切じゃないですからね。

寺尾 そうそう、そういうふうに杉先生は何しろ理論をおこした人だから、ただ表をつくるなんてそんなことが

主眼じゃなかったわけだ。2つの会がやっていることはかなり違うんですよ。ただ、だんだんこれが一緒になって、やっていることが同じようになってくる。だから、しまいには合併しちゃうんだけど、実によく会合を開いているんです。両方とも毎月やっている。そしてそこでいろいろな研究方法をやるわけだ。

そのことは、この間の創立100年記念のときに出したので、ただ、あのときはスタケスチックのあれだけれども、「統計学雑誌」はスタケスチックの機関誌で、片一方は「統計集誌」といったと思います。「統計学雑誌」というのは「スタケスチック雑誌」の改名したものです。

安川 今回、先生が特に興味をお持ちくださってお調べくださった動機は、何かおありだったんでしょうか。

寺尾 何を……？

安川 われわれが考えておったのは、もっと50年単位の、学会ができるときだけ、体験的な方だけを考えておったんですけれども、そのもっと前史なるものを。

寺尾 いやいや、ぼくは、福沢先生の伝記がおもしろいものだからそれをやっていたら、とにかく初めての留学のとき、あのときはたった27歳になったときだな。

安川 留学って、咸臨丸ですか。満でいうと25歳ですね。

寺尾 こっちは教え年でやっているんだな。そのときにちゃんと翻訳をやっていたというので、何をやっていたかと思ったら、それが「万国政表」というので、これはおもしろいなと思って、そんなことで調べたんだ。

一番おもしろいのは明治14年の政変だ。このいきさつは実におもしろいんだな。

安川 ドラマでも、さんざんテレビなんかでやりますけ



れども、いま先生のおっしゃっているのは、統計学とい  
えは一般的じゃないけれども、そういうことに絡んだ話  
は全く出てこないで、ドラマチックなのが出てきますね。  
寺尾 あの政変のおかげで、慶応では「時事新報」をつ  
くるんです。もともとあの騒ぎの起こりは、政府が福沢  
先生に、政府の新聞を発行してくれないか、「公布日誌」  
という題の新聞を出してくれないかとかけ合う。これは  
伊藤、大隈、井上の3人が福沢先生に頼むわけだ。

ところが、議会の開催のこと、憲法のこと、そのあた  
りで実はだんだん3人の意見が分かちまう。初めは4  
人とも大変仲がよかったのに、大隈とあとの2人、伊藤、  
井上とがどうもだんだん意見が合わなくなるんだ。それ  
で、福沢は初めに新聞の発行の交渉を受けたときに、も  
ともと何かその気があったらしいんだ。そろそろもう準  
備をしていたんですよ。そのうち今度は向こうの方がち  
っともそんなことに興味を持たなくなっちゃったらし  
くて、立ち消えになっちゃった。それだから、後で自分で  
じゃつくろうとって「時事新報」ができたわけで、き  
っかけは14年の政変なんです。

守川 そうですか。

これは記録なんかとらないでいいんですが、逗子の尾  
崎号堂の屋敷内に住んだことがございまして、そのとき  
に、書生さんが号堂のことを書いた本がありまして、そ  
れは一般に売られた本じゃないのですけれども、それ  
を見せてもらいましたら、号堂が書生さんに向かって、「君  
は、大隈重信と伊藤博文と——自分としては、人格的に  
も政治家としても大隈の方が伊藤よりもはるかにりっぱ  
だと思うけれども、なぜ結果的に明治の世に名を成した

のは伊藤であって、大隈が野に下ったと思うか」と聞かれるのです。そんなことを急に聞かれてもわからないのですが、号堂が、「昔、品川に住んでいたころに新橋から汽車で横浜に行く途中、伊藤という人は、『八山下の品川の陸橋の下を通ったので、ふとあなたのことを思い出しました』というはがきをノ通くめる人間だった。大隈というのは筆不精で、そういうことを何もしなかった。それが結局は、人に与える魅力という意味からいってそういうふうになったと自分では思う。だから、君も偉くなろうと思ったら、筆不精はかたく慎まなければなりません」と、号堂がいつているのです。

寺尾 けれども、14年の政変の後で尾崎、大養なんかはクビになっても、大隈の方について立憲改進黨に入っちゃう。そうしておいて、ただそのときには統計関係だけではなくて、政府にいた福沢の息のうんとかかっているやつはすべてクビになるんですからね。そのときにみんなを追っ払われてしまって、政府というものを断念して、実業界に皆飛び込んだじゃうわけだ。だから、結果から見れば必ずしも損じゃなかったかもしれないんだ。あのままだら、いまの慶応とは違ったものになっていたわけだね。

安川 すでに私たちの聞いた高橋先生の講義の中で、「明治14年の政変当時は、尾崎号堂はこっちは役人でございまして」という話をされていましたね。

寺尾 必ずしもこっぴゃじゃないんだよ。あれはみんな統計院のれっきとしたあれで……。

安川 その当時は商工省か何かの役人でした、号堂は。最後に、大臣やっていますからね、商工大臣か何か。

寺尾 それはずっと後だ。

安川 大隈重信も後に総理大臣になるわけですからね。  
大正9年あたりですか。

寺尾 あれは政府というよりも、政界に入ったから。

安川 官界を去って、むしろ政界に入ったわけですね。

寺尾 政界に入ったわけだ。官界をあのかぎに断念したわけだな。

さっきの話でぼくはちょっと間違っただことが一つあるんだ。例の福沢が大隈と初めて会った明治7年に、大隈の紹介で伊藤及び井上と知り合いになった。大変仲よくなった。そして大隈の手下に、矢野、小泉、尾崎、犬養、この4人を推薦した。ところが、この中の小泉は後で統計院なんかに入らない。留学して保険学の勉強に行っちゃって、後で結局明治生命をつくる原動力になったんです。そのかわりに牛場卓蔵が入っちゃった。これで矢野文雄、牛場卓蔵、犬養毅、尾崎行雄の4人が統計院の幹事で、そして矢野は太政官権大書記官、牛場は太政官権大少書記官、犬養、尾崎は同じく権小書記官。だから、牛場、犬養、尾崎なんというのは、矢野よりは少し位が低かったんだらう。

安川 この牛場卓蔵さんの息子さんが牛場泰蔵さんであり、そのお兄さんが牛場文彦さんですね、政府代表になっている。

寺尾 牛場卓蔵……？

安川 これは泰蔵さんから聞いていますよ。山本登さんと一緒だった、医学部に行かれた泰蔵さんのお父さん。

寺尾 卓蔵じゃあいなだ。

安川 というのは、この間あることから話が出たんですけども、福沢先生がお父さんのところにくれた手紙が残っているんですけども、福沢先生という人は名前のことを気にしない人で、卓藏の藏という字を藏と書かないで造という字を書いてくる。2通だけちゃんと書いてあるのがあるので、額にしてあるようです。

寺尾 卓藏という人は福沢門下で非常に優秀だったということはわかるけれども、牛場泰藏さんを紳士録で調べてみると、兵庫県牛場何とかの息子だっ書いてある。それが卓藏じゃないんですよ。

安川 私はじかに泰藏さんから聞いて……。

寺尾 そうか。ぼくは当然そうだろうと思ったけれども、念のために紳士録を引っ張り出してみたら、何々の長男だとか次男だとか書いてあって、そのあれが卓藏じゃないんだ。

安川 もう一遍調べてみましょう。まさか、おじいさんというはずはないでしょう、年からいったら。

寺尾 おじいさんじゃないかな。

安川 あっおじいさんだ。おじいさんですわ、山本登さんと一緒だということは、先生のお父さんが信吉さんですから、おじいさんですわ。

寺尾 ぼくは、どこかに卓藏というのがあるかと思って、紳士録をずいぶんひっくり返してみただけけれども。

安川 それじゃ、おじいさんがそういっておったという話を聞いておったらしい。

寺尾 おじいちゃんが卓藏で、その息子さんが何とかという紳士録に出ているあれで、その子供なんだ。あそこはみんな兄弟だから。

安川 何でそんな話が出たかといいますと、国際文化会館で、富田正文さんの下におった清岡さんの喜の字の祝いのときに、私が富田先生に、現存する人の中で福沢先生に一番似ているのはだれかと聞いたら、中村仙一郎さんだと自分は思うといったんで、その話を牛場泰藏さん一緒でしたから話したら、思い出さないのですよ。それでさんざんいったあげくに、泣き仙か、泣き仙といったらわかるんだというので大笑いになった。

寺尾 大隈さんとあれとは非常に縁が深か、たわけだ。大隈さんに、明治12年1月31日付でこういう手紙を出しているんですよ。これは福沢先生の書いた手紙ですがね。

「不順の氣候、益々御清穆被成御座奉拝賀。先日は拝趨御他出前御妨仕恐縮の至、その節御話スタチスチックの義に付、小幡氏へ御面会も可被成旨、早速同人之申聞候處、兼て其志す所、何卒御目に掛り様々伺度義も有之旁以御都合次第何時にても参上仕度、御序の節其日時御一報奉願候。」——要するに何か統計の話が出て、スタチスチックの話が出て、そして小幡が、自分もそれに加わりたいといったわけだ。

「当塾の社中にて旧年来申合時々相談いたし居候様子なれども、」——要するに、小幡一派が何かスタチスチックのことをやりたいといつてワーワーいつていた。

「連も人民私の仕事に参るべき事柄にあらず、何とか工夫致度と唯々話に日を消し居候折柄、偶然に其御省の」——大隈さんのやっている省だね。この省が大蔵省だと思ふのですが、「御省」というんだから。

安川 政変の前ですからね。

寺尾 「思召立、何卒盡力為致度事に御座候。」——だか

ら、何か一部を設けたいという話を福沢先生に話したら  
しい。そうしたら、それにぜひ参加したい。

「別紙姓名は先づ其仲間の数に候得共、固より特に其  
道に長じたる人物と申にあらず、或は事を為す間に退  
屈して脱社する者もあらん、旅行する者もあらん、唯  
今日有志と称する人の名を擧げたるまでの事に候得ば、  
決して当てには被成下間敷候、右は要用のみ申上度、  
早々頓首

一月廿一日

大隈先生史

福沢諭吉

こう書いて、そしてそこに名前をず々と列挙している  
のです。それが

小幡篤次郎	阿部泰蔵	猪飼麻次郎	森下岩楠
森島修太郎	吉川泰次郎	日原昌造	伊藤銓一郎
高木恰荘	古渡資秀	須田辰次郎	四屋純三郎
高力衛門			

これだけの名前を書いて、そして最後に「外に是は統計  
局の人」として、杉亨二、新井金作、呉文聡の3人の名  
前を書いているのです。だから、やっぱりこれはその省  
へ入れたかったんだ。ところが、結局こんなものはでき  
なかった。だから行かなかった。福沢先生というのはいか  
なり熱心に、どうにかして統計の世界へ弟子を入りたい  
と思って、かなり努力をしたらしいんですね。

安川 杉亨二と福沢先生の年の関係はどうなるのですか。  
寺尾 杉さんの方が少し上。これは適塾の先輩だもの。  
安川 なるほど、そうですか。呉文聡といえば、先生の  
ところにもあるのですか、私のところにも実はこんな厚

い本が来て……。

寺尾 あれは息子さんの呉文炳さんが日大の総長で、おやじさんの書いたものを集めたものだ。あれを見ても、あまり統計のことはないんですよ。

それよりも、呉文聡はずいぶん翻訳なんかやっている。けれども、統計に関する自分のまとまった書物というものはあまりないようだね。これは実際に杉先生の左腕のようになって、初めから大変よく働いている。

そして、呉さん、横山さん、それから岡松径という3人がメンバーで、後で慶応の先生になる。それにもう1人、パウロ・マイエットさんが加わる。この4人が私以前の先生だ。

安川 それじゃ、それは次の機会です。どうもありがとうございました。

これは、昭和55年10月20日（月曜日）、2時50分～4時25分まで、慶応義塾の研光棟名誉教授室で録音したものであります。

(第1回了)

# 日本における統計学の発展

## 第 2 卷

話 し 手 寺 尾 琢 磨

聞 き 手 安 川 正 彬

1980年11月10日(月)

慶応義塾大学にて



宇川 それでは、お話の続きをお願いします。

寺尾 例の明治14年の政変で福沢門下が官を追われた、その辺までお話ししたような気がするのです。一体なぜそういうことになったのか、それが、それ以後の慶応の統計にどんな影響を与えたのか、ということをやっとお話ししてみたいと思います。

この前に申しましたとおり、政変によって大隈自身はもちろん、福沢門下の重要な連中はみんな官を追われたわけですが、その中には必ずしも追われなかった者もいる、もとのまま官にとどまった者もいますけれども、大物はあまりいなかっただのです。大物はみんな一掃されたというのが正しいと思うのです。

その連中がその後何をしたかという、まず一番の親方は例の矢野文雄ですが、これが大隈の腹心でいわゆる統計院を牛耳った男です。矢野は大隈とともに追われて、すぐに大隈のつくった立憲改進黨に参加するわけですが、しかしそのときに、同時に尾崎行雄、犬養毅、これも立憲党に参加しています。それで統計とはもちろん縁のない生活に入るわけですが、矢野は龍溪という名前で文筆家を兼ねたわけですが、例の「経國美談」という歴史小説を書いてベストセラーになった、歴史物の草分けといわれているんですね。

実はきのう富田(正文)さんに会ったから、「矢野さんのその後はどうなっているか」と聞いたら、あまり自分もよく知らないけれども、最後には何省だったか、文部省じゃない、何かの官庁に入って役人で終わっただらしい、というようなことをちょっといってあったけれども、ど

うもはっ きりしないのですよ。一時は大変鳴らした男だけれども、その後には調べてみないとよくわからない。

安川 一族がわかればそれをたどれば……。

寺尾 これは少し調べてみればわかると思うのですがね。

それから犬養、尾崎は当時新聞をやっていたわけだから、いわゆる記者生活にかえって、そろそろ政界への準備を始めたということですね。それから例の牛場卓藏も、これは「時事新報」に入るわけですね。そして特に朝鮮の問題で大変活躍した人らしい。あのころ日本と朝鮮との間でいざこざが起こって、日本の官吏が向こうで殺されたりなんか、そんなことがあったらしい。それで向こうで日本との関係をどうにかよくしようというので、牛場を政府顧問に招聘する、そしてこれが朝鮮へ渡るのである。これはもちろん福沢先生の意向でそうなる。「時事新報」は大変朝鮮問題に熱心で、政府よりも詳しい情報を持っていたというんですね。それでそのために「時事新報」が非常によく売れるようになって、慶応の財政が潤ったということがあるのです。

だからこれも統計とは離れてしまって、この4人は統計院における一番の重要な人物だったのに、14年の政変以後は全然統計とは無関係になってしまったということですね。

何か非常におかしいふうに思うんだけど、しかし考えてみるとこれはあたりまえなんだ。というのは、大隈が統計院をつくった趣旨というものは、必ずしも統計の進歩のためにつくったんじゃないんだ。これは近く開かれるであろう国会対策として政府側で答弁しなければならぬ。その答弁のできるような人間を養成しようとい

うのが目的だったらしい。それで尾崎だとか矢野だとか犬養、こんを連中はそこに入るときに、「おまえは統計のことは何もやらなくていい」と大隈からちゃんとお墨つきをもらっているのです。それで広く一般の政治情勢の研究をやればいいというんだから、初めから統計とは関係なく入っているんでしょう。それでいながら高等官として入って、それまでの統計の専門家なんというものはみんな下端になっちゃう。

そこでそのころ呉（文聡）さんがこんなふうに書いていますよ。「吾々のような初めから統計に関係した者が、高等官の末席にでも進んだなら、統計の道も進み、幾分か目的も立ったかも知れませんが、このとき高等官の中には新聞記者上がりの、統計が何だか分からぬ人が多かったので、統計を畢生の事業と考えていた者は非常に落膽しました。」こういうことをいっているくらいで、全然この連中は統計のことはやらなかった。位だけ上でただいばっていたらしい。

要するに統計院から追われても、初めから統計をやっていなかったんだから塾の統計には関係ない。福次先生は初めからもちろんこれを知っていたわけで、統計家になるようにと思って大隈に推薦したんじゃないんですね。大隈の腹心となって政治家にするつもりで、やっぱり出しているんですね。

それで問題は、初めに例の小幡篤次郎、あるいは阿部泰蔵なんかわざわざ統計協会までつくったわけでしょう。あの連中が一体どうしたかということだ。あの連中は、実はもうあの会をつくってほとんど統計のことはや

っていないんだな。小幡さんは間もなく塾に帰って、そして福沢先生の片腕となって、塾の運営に熱中してしまうわけですね。それから阿部さんは例の明治生命をつくらって、その運営に全力を傾けるというわけで、みんなほかの方に行ってしまうんだな。

ただ一人、そのときに初代の統計協会の会長になった渡辺洪基は長いこと会長の役目は勤めていた。しかし実際の活動の性格というか、それは統計じゃなくて、まず明治18年、東京府の府知事になって、その翌年あたりには帝大の総長になった。それから今度は外交官になって、オーストリアとかスイスへの全権公使になって行って活躍した人で、これも統計とはあまり関係ないんだ。

ただ統計協会の会長としては残ったけれども、ここでは実際に統計の仕事はあまりやらなかった。

結局、そのときにずっと統計を続けていたのは呉文聡さん。これは最後まで熱心に統計のことをやった人ですね。呉さんはその後、明治31年に農商務省の統計課長になるのです。そして呉時代といって、大変華やかな、自分が計画を立て大勢のポストをつくらたり、そんなようなことで大いに威勢をふるった時代があるわけで、呉時代とよく呼ばれるんだけど、そんなことをして、結局生涯統計協会、あるいはスタケスケット社に重要人物としてずっと残っていたわけですね。そして晩年には統計学社、すなわちこれはスタケスケット社の副社長に呉さんはなっている。

それからほかには、あのとき初めから福沢門下として行った連中の中には入っておらぬけれども、例の岡松径と横山雅男が、生涯、協会あるいは統計学会にとどまっ

て、中心人物となっていた。このことは、どうせ後で塾が大学になってから、呉、岡松、横山、この三人は先生になりますから、そのときに少し詳しくお話ししたいと思います。

それから、問題は統計院をつくらした場合のいきさつですけれども、だれがそんなものをつくらうとしたのか。もちろん、つくらうと思ったのは大隈さんだろうけれども、その案を初めに大隈に進言したのはマイエットなんです。パウロ・マイエットがドイツの制度を参照して、要するに統計に関する強力な中央機構をつくらうとして、一つの案を大隈に提出しているのです。それをバックしたのが杉亨二。したがつてこの二人が提案者なんですね。

ところがその案に従ってというか、それを参考にしながら機構の案をつくらったのが矢野文雄なんです。矢野文雄はすでにそのときには大隈の本当の片腕になっていて、マイエットや杉さんが考えた機構とは非常に違ったものをつくらせてしまった。マイエットや杉さんは、純粹の統計の問題として、その統計を推進するために強力な機構をつくらう、そのためにやったのに、矢野がこしらえたものは、さっきいったように、そうじゃなくて国会対策のための高級官吏を養成する場所にしよう、そんなようにしてしまっただけなんだ。

それで、例の杉さんだけは統計院に残るけれども、実権は矢野が取ってしまった、杉さんは片すみに追いやられてしまっている。杉さんは例の甲斐の国の人口調査、それが終わって、それを本にするためにその整理に没頭して、ほかの連中が院でやっていることにはほとんど夕

ツケしないんだ。それで杉さんの子飼いの連中もみんな下っ端にされてしまって、さっきいったようにみんなが不平を漏らした、こういうんだな。それで、統計院は数年後には統計局になっちゃう。

安川 縮小されちゃうのですか。

寺尾 そうなんです。統計院は太政官統計院、それが大隈がいなくなつて、そして予算も削られてだんだん小さくなって、明治18年について統計院は廃止されて統計局になってしまう。そのときに杉さんも官吏をやめちゃうのです。それ以来先生は官につかない。

そのころ福沢先生は直接もう統計のことにはタッチしないで、むしろいまから考えれば、間接的な形で統計の発展に貢献していたといえるのですが、それは例の保険業です。保険、特に生命保険と統計とが密接不離の関係にあることはいうまでもないことですが、その保険は福沢先生によって日本で始められたわけですね。

日本に初めて保険を紹介したのは福沢先生で、あれは「西洋旅日記」という、慶応3年だったか、第2回のアメリカ旅行から帰ってきて書いた本の中で、初めて保険の大切なことを説いている。

それから次は、例の上野の戦争のときに先生が読んでいたという、ウエーランドの、あの中に保険の項があって盛んにそれを講義した。その講義を聞いた者の中に、阿部泰蔵なんかみんないるわけですよ。小幡さんとか、丸善をつくった早矢仕有的、これは大變塾にとっては大事な人で、そういう連中が講義を聞いたわけだ。

先生が早矢仕有的に「今度はおまえ、ひとつ商社をつ

くれ」といって、丸谷商社というのをつくらせる。それが丸善の濫觴なんです。それで死亡請合条令といったか、一種の生命保険を始めるのです。それは数年で、どうもダメになっただけなんです。

そんなことをしている間に小泉信吉がイギリスから帰ってくるのです。これはイギリスに保険の勉強に行ったんです。専門的に保険を勉強してきた。それが確か明治11年です。それで大々的に保険業を始めようというので、福沢門下が集まって相談する。そのときに相談にのったのは、もちろん小幡、それから早矢仕、阿部、それから物集女清久、こんな連中が集まって相談するのです。そして白羽の矢が立ったのが阿部泰蔵、これが明治13年に明治生命をつくったわけだ。

だから小幡さんとか阿部さんというのは、初めに例の統計協会をつかって、何か協会を一生懸命やるはずだったらしいんですけども、2人とももう方向が違ったわけだ。それで、直接にはやらないんですけども、しかし、明治生命をつくったことによって、日本の人口統計の発展に間接には非常に大きな貢献をしたわけですね。

そんなわけで、結局、初めに統計をやるであろうと思われたような連中がみんな統計を離れてしまって、福沢先生も、とにかく官庁との関係がなくなったものだから、もう後は「時事新報」を創刊して、そこで民衆教育の必要を悟ったわけだ。もっと民衆を教育するために新聞をつくろうというので、「時事新報」を創刊する。

そうしておいて、後はその数年前にできた交詢社の運営をやるし、それから、とにかく慶応義塾という学校をもっと整備しようというので、着々大学開設の準備に入

ってしまう。だから政変以後大学開設までの間というのは、どうも統計の業績は何もないように思うのです。

そんなわけで、明治23年の大学開設まで飛んでしまうわけだけれども、明治20年ころから、福沢先生は専門教育の必要を痛感して、それまでは福沢塾であって、どうもまとまったシステムは持たない教育をやっていた。何か手当たり次第の本を読んだらしいんだ。そうでなく、ちゃんと規則立った専門教育をやろうというので、明治23年に大学部をつくるわけだ。

それで統計学に関係のあるのは、その中の理財科だけで、大学部を設けて3つの科を置いた。文学科、理財科、法学科、その中の理財科が問題になるわけです。

そのときに、大学を開くために、アメリカのハーバード大学に助けを求める。そして向こうの総長の好意で、3人の学者を呼ぶことができた。それが3つの各科の長となる。いまでいえば学部長になるような人を3人呼んだ。そして理財科に来たのがガレット・G・ドロパーズです。

この人が明治22年の暮れに日本に来た。こちらで新しい学則をつくっていたのが、後の千代田生命の社長になった門野幾之進。これがアメリカに行つて、アメリカの大学の制度を勉強してきたわけですね。そして、新しい学則をつくっているところへドロパーズがやってきて、おそらく2人が、新しい学則をつくり上げるために協力したんだろうと思うんだ。

このドロパーズという人はハーバードの出身で、ドイツに留学して歴史派の洗礼を受けた人なんです。シュモ



ラーとかワグナーとか、そういう人たちの教えを受けた。シュモラーやワグナーは、これはドイツにおけるドイツ派の統計の一派の中に入っている人で、そういう人からおそらく統計に関する何らかの教育を受けたんじゃないかと思わせる。それで、新しい理財科はドロパーズの意見が大変入っているようで、歴史尊重という傾向が非常に強く出たわけだ。

ただ、その翌年の23年から大学は開校されるわけですが、けれども、すぐに統計の講義はなかった。統計の講義が始まったのは、上の方の学年に置かれたものだから、その翌年、24年からです。そのときの先生が、例のパウロ・マイエットと岡松径の2人だ。岡松径は明治24年から明治32年まで、約9年間塾において講義をしたようです。マイエットは、正味1年半ぐらいしか塾で講義はしなかったようです。

この理財科の主任のドロパーズが、また統計の上で1つのおみやげを日本に残した。ここに「日本人口統計史」という本があります。これは有名な高橋梵仙先生が編さんした本で、この本は5つの論文を翻訳したものなんです。その中の第1番目は、日本の井上瑞枝の「大日本国古來人口考」という論文を、そのままここに転載してあります。第2番目がマイエットの「日本人口統計論」です。第3がドロパーズの「徳川時代に於ける日本の人口」という論文なんです。

マイエットの「日本人口統計論」は、明治15年(1882年)に書いた論文ですが、これが日本において外国人が書いた人口統計に関する最初の文献だ、といわれているんです。いま読んで、これはおもしろい論文です。本人が

統計の講義をしたという記録は何もないけれども、この人は後で国へ帰ってから、ドイツの統計局の職員になっているくらいですから、やはり統計は専門だったらしいんだ。

ただ、この人は明治7年か8年に日本に来たといわれて、はっきりわからないのですが、岩倉具視の一行がヨーロッパへ行ったときに、マイエットが、何とかいう日本のそのときの公使の紹介で木戸孝允に会っている。そして、郵便貯金を日本でもやれということを勧告するのです。そして、木戸が日本に帰ってきてそれを思い出して、大蔵省のお雇い外人として呼ぶわけです。そのころ日本は発展期ですから、大いに資本が必要で、その資本をどこから集めるかできゅうきゅうとしていたんで、マイエットの郵便貯金をやれという説が大変受けがたく、それがもとになって、大蔵省でこの人は大変重要ないろいろな役目を仰せつかるわけです。それで大蔵省に入りまして、太政官の会計部の顧問になって、後、さらに今度は農商務省の顧問になる。そして、さらに外語や一高の教授になり、最後は東大の教授にもなっている。そのときには逓信省の顧問というのも兼ねて、いろいろなことに首を突っ込んだらしい。

この人のやった仕事は、木戸孝允が華族、士族の救済案を出したときに、それを非常にバックしたということが第1。第2には、国営の火災保険をやれということをした。第3番目には、統計院と会計検査院をつくれということを進言している。第4に、北海道拓殖路、これが大変多くのボリュームを占めています。

その中で、農業保険を大変勧めています。本もたくさ

ん書いたし、いろいろな提言をやっておりますけれども、残っている本の中で一番有名なのはこの「日本人口統計論」です。これは支那の人口調査、それと日本との比較ということから説き起こして、要するに、そのころの日本の人口統計というのは全くでたらめで、これじゃいかぬ、もっとはっきりした人口調査をやれというのが結論になるわけだけれども、これが、後の日本で国勢調査をやるようになった一つの大きな原動力になるわけですよ。

ただ、マイエットはノ年半ぐらいいしか塾にいなかったものですから、どういう講義をやったのかよくわからないのです。そのころのほかの大学の統計の講義を調べてみても、名前はあっても実際にはやってなかったものが多いのです。カリキュラムにはちゃんと入っているんだけれども、実際には、後に本式に始まった、たとえば東大あたりが統計の講義を始めたのは、高野岩三郎先生なんです。ところが、前から統計の授業の講座名はあったんだ。けれども実際はやっておらぬ。

安川 適当な人がいなかったんでしょうね。

寺尾 人がいなかったんでしょう。それから、早稲田も初めから統計の名前は挙がっているけれども、実際にはずっと後になってからやったんじゃないか、果たしてマイエットさんが、塾でその間本当に統計の講義をやったかどうか、これも学校の資料ではわからないのですよ。ただやったことになっている。おそらくドロパーズさんの方が、何かそんな講義めいたことをやっているんじゃないかという気がするんだ。

ドロパーズという先生は、一人で理財科の主要科目をみんな独占しちゃったんですよ。原論、経済史……、こ

ここにみんなあるけれども、ありとあらゆる重要科目はみんな一人でやっている。もともとワグナーやシュモラーの教えを受けた人だから、そのころドイツで大変統計の議論が盛んになった時代だから、おそらく統計の話なんでもものも、ドロパーズさん、講義の中に入れていないんじゃないかという気がするんだけど、残念ながら、そのころの資料が塾に何も残っていないのです。

ただ、少なくとも表面的にはその同じときにドロパーズとマイエットという、少なくとも日本の人口統計に大変関係のある二人がそろって塾にいたということ、このことは大変奇縁だと思うのです。

そのときの統計学の講義は、マイエットと並んで岡松径がやっているわけですが、この人はまじめにやったようです。岡松径という人は嘉永3年(1850年)に生まれて大正5年に亡くなっている。この岡松径の径の字だけけれども、学校の資料を見ると経済学部の「経」の字が書いてある。ところがほかの資料を見ると、みんな「径」なんだ。おそらく塾の方が間違っていると思う。

この人は明治9年に太政官の製表課に入って、杉先生の手下になるのです。そこで統計を勉強する。杉先生がスタケスチック社をつくると、すぐにそこに入りまして、そこで重要なメンバーになり、たくさんこの人の報告論文というのは残っています。これがまた、なかなかリッパな報告なんです。この人は本当の学者だったと思う。リッパなものです。それからずっと最後まで、この統計協会、あるいはスタケスチック社、あるいは統計学社、これの重要なメンバーとして残るのですが、その間にはいろいろなことをやっているのです。明治19年には農商

務省へ入りまして、それから23年には陸軍の経理学校の教授になる。それから、さらに24年から44年までは陸軍教授というのですから、陸軍大学だと思っただけがね。43年には、国勢調査の準備委員をやっている。塾ではさっきいったように、24年から33年までの9年間、統計の講義をやった。

この岡松径は大変な学者らしくて、明治16年に例の共立統計学校ができたときに、その教授に選ばれているのです。共立統計学校というのは、杉先生が言い出してつくった日本で最初のシステムチックな統計の講習所であり、非常に程度が高いらしい。それから授業が大変多いんだな。時間なんか非常に多いんです。その後もう日本には、おそらくああいう統計学校というものはないわけ、最初にして最後の統計学校だったかもしれない。

これは要するに統計院がつくったわけで、明治14年の政変で、その一つの副産物のような形で学校が置かれたわけだ。杉さんという人は、若いうちから専門家の養成に非常に力を入れている。特に後継者を養成しようというので、明治の初めから弟子のために大変な苦勞をするわけですが、それをシステムチックにやろうというので、共立学校をつくったわけですね。

共立学校は明治16年にできたけれども、間もなく官制が変わって、明治18年にはもうそれが存続できなくなるのです。それで19年だったかに第1回の卒業生が出て、そのまま廃校になっちゃう。最初にして最後の卒業生なんです。その卒業生の中に横山雅男さんがいたわけだ。だから横山雅男さんというのは、本当の杉さんの子飼いの弟子だったわけだ。この横山さんは後に慶応に来て、

もちろん慶応の先生になった。

横山さんという人は、文久二年（1862年）生まれて、昭和18年、戦争の末期に亡くなっている。明治19年に共立統計学校を卒業して、すぐにスタチスチック社に入り、終生そこにとどまるわけです。杉さんが亡くなった後で、この横山さんがその会長になっている。スタチスチック社が、例の統計学社と名前を変えるでしょう。そのときの会長です。

その間に、陸軍大学の統計の教授になったり、内閣統計局の審査官、こんなものをやっています。しかし、お役人としては大したところへ行かなかったわけで、活動はほとんどスタチスチック社、それから統計学社、あるいは統計協会、そこの仕事を中心にやっています。

守川 このころの陸軍大学の講義というのは、国勢学なんだろうね。

寺尾 ぼくは、わりにこういうところでは、程度の高い統計の講義をやっていたんじゃないかと思うな。何しろ、共立統計学校の程度というものは非常に高いんだ。そのころとしては最高のものだったらしいんだ。

守川 そういうところで使っていたテキストとか、記録とかいうものはないのですか。どんな本を使って講義をされていたかというものは。

寺尾 これはHaushoferの“Lehr- und Handbuch der Statistik”の「歴史及理論之部」、「人口之部」、「経済之部」とか、いろいろなのがあつたのです。それを、たとえばほかの人も、岡松経なんか「人口之部」の翻訳をやっています。同じように、その本に従って講義をするんだな。それがみんな残っているらしいんだ。だから陸軍

なんか、ああいう当然統計の必要なところでは、相当程度の高い講義をやっていたんじゃないかと思われるんだけどね。

安川 私が頭に描きましたのは、陸軍という特別の立場のところですから、国と国との比較をする、国際間の統計事情なんかの比較とか、そういうことなんか相当主体的かもしれないと思ったのです。方法論の問題よりかは、

寺尾 陸軍なんかで……？

安川 はい。

寺尾 それはそうだろうな。比較が中心だろう。それは当然だろうね。

安川 ある時期は、学問は軍事目的だったりしたことも、特にこういう分野はあり得たと思うのですが。話は飛びますけれども、オーストリアからスキーなんかの少佐が来たのは、軍事目的ですからね。雪が降っても軍隊が攻めらるとか。最近では、ロゴス射撃やったり、オリンピック競技で、スキー履いて射撃やったりするのは、まさに軍事目的でしょうね。

寺尾 何でも軍事目的と結びつけるでしょうね。

しかし、比較という意味だったら、福沢先生自体が、若いころ、ずいぶんいろいろなものを出しているのね。慶応から明治にかけての時代に、「万国国盡し」とか、掌中何とか、みんな一種の製表なんだな。

安川 問題は、「製表」を「統計」と訳すところに大きな転換があったんじゃないかとは私は思うのです。「製表」と言った時代は、まさに数字を集めてきて整理してながめてみる、ということですからね。

寺尾 そうそう。だから、福沢先生なんかが最初に考えていた統計というのは、製表だったんだね。

安川 と思いますね。

寺尾 しかし、それがバックルなんかの影響で、本当の意味の統計というものがだんだんに入ってくるんだね。

安川 そこでおもしろいと思いますのは、スタティステイクスという言葉が、Sがちゃんときながら、1つは統計であり、1つは統計学であるということですね。

寺尾 福沢先生が最初考えていたのは、全く統計の数字だけの問題であって、先生はそれを利用すればいいと思っていたんじゃないかと思う。だから、先生はついに本当の意味の統計学はやらなかった。

安川 前史みたいなものですね。統計学前史。

寺尾 そうそう。統計学前史だね。だから、塾なんかで一体いつごろから、新しい意味での統計が講義されたか。ほくは、岡松経あたりはもうそれをやっていたんじゃないかと思うんですがね。あの人の書いた論文、たくさん、今度「記念論文集」の中にありますね、実にみんなりっぱなものですね。

安川 その中に、大教法則なんて出てきますからね。

寺尾 大教法則なんという字なら、横山さんだって盛んにやったし、われわれも聞いたわけだけれども、これがどうも数学を抜きにしているものだから、このごろ例の生命保険で有名な藤澤利喜太郎、あの人が、数学家でなければ統計学はできない、という論文を書いたんだよ。それに対して、横山とか岡松とか、こういう例の協会に属している連中が大変な反発をして、それは違っているということで、一時大変な論争があったんだ。



守川 それはまさに、政治算術と昔の確率論とが統合されてくるわけですけども、そこに相入れないものがあるというのと同じ考えですね。

寺尾 北川(敏男)さんの一派と増山元三郎、あの連中が一時戦後にやって、それに対して社会統計派が大分反発したこともあるんだよ。蜷川君が食ってかかって、ぼくがとめに入ったことがあるんだね。そうそう、あれなんだな。

守川 いつの時代でも、何か統計の歴史の中にも、17世紀、18世紀ぐらいから算術派が起こったときにも、イタリアで起こった、古典確率論の問題がありますし、お互いがお互いを理解し合わないものだから、お互いに我を張っているようなもので。

寺尾 だから、両方離れて発達してきたんだね。統計学というものが。藤澤利喜太郎さんは、初めて日本人の生命表をつくった人で、それまではのんきなもので、外国の生命表をそのまま使っていたんだ。

守川 それは、私がアメリカのプリンストン大学に行っていましたときに、トルコからの私と変わらない年配の留学生が、「自分のところでは生命表がない」というんですよ。「君のところじゃ、生命保険がないのか」といったら、「生命保険はあるんだ」というのです。「生命表どうやって使っているんだ」といったら、「ギリシャとかイタリアとかのを使って、一応割り出すんだ」とかいつていましたけれどもね。

寺尾 しかし、あそこらは隣の国とそう違わない。ただ、あのころの日本とヨーロッパは全然違ったはずでしょう。だから、これは本当にでたらめだったわけだね。

安川 私がモデル生命表をつくったころでも、諸外国と日本とは、特殊な事情があって、死亡率の型が違うんです。それだから、またつくったんですから。

それからまた、プリンストン大学でも、コールさんという所長さんが世界のモデル生命表を、区域で分類しましてつくったときも、日本だけは特殊だといって外したのです。

寺尾 だけれども、やっぱり日本にちゃんと独自の生命表がなければダメだ、ということがはっきりわかるようになったのは、生命保険というものがあつたからでしょう。だから、保険業をつくった福沢先生は、間接的には統計の発展に非常な貢献があつたといえるんだな。

安川 何か、そういうものが先々に必要なんだ、ということ強く感じ取られたセンスというものは、すごいものだと思いますね。ご自分が手を出さないまでも、技術的な知識をお持ちにならないまでも。そういうものがこれから非常に必要なんだ、ということを感じ取っておられたと思うんですがね。

寺尾 先生の書いたものを読んでみると、たまげるくらい広いね。

安川 碩学というか。

寺尾 また、先のことをすいぶんよくわかっていたんだね。偉い人だよ。ますます頭が下がるけれどもね。

呉さんが塾でやった講義というのは、あの全集の中に、呉さんの遺作集の中に、いろいろな論文があるから、あれをつなぎ合わせてみれば大体見当がつくけれども、これは大変平凡な講義だったように思うな。

安川 矢野文雄さんという人は、その後の第一生命の矢野さんとは、全く関係のない人なんですか。

寺尾 どうもそうらしい。ぼくは関係あるのかと思ったけれども、何かで調べればわかると思うけれども。

安川 ついさっと結びつけがちですね。同じ生命保険ですし。

寺尾 例の牛場さんみたいな……。

安川 牛場さんの場合は、話飛びますけれども、おじいさんとお孫さんが政府の顧問をやったということですから、これもおもしろい。1つのすぐれた方々、ということになると思いますけれどもね。

寺尾 この間、例の「福沢山脈」を読んでみたんだけど、あれにも矢野さんのことは、初めにちょっと出てくるだけで、後はほとんど数人だけに詳しくしぼっちゃって。

安川 やはり、時代の大きな流れの中ですぐれた学者が出て、内容も実に充実した高度なものを講義したという場合に、果たしてみんなついていけたんですかね。そのところがなかなか問題のところ……。

寺尾 そうねえ。

だけど、よく調べてみると、そのころの杉先生の弟子というものは、ずいぶん大変な勉強をしていたらしいんだよ。明治になるかならぬかのうちに、フランス語にすっかり通曉して、フランスの統計の本なんか訳したり、そんなことをやっているし、われわれがいま想像するよりは、はるかに進歩していたと思うんだ。

ただ、いかんせん、そのころの本元が、いまと違ってまだ統計というものがかなりあいまいだったわけだね。

だから、それを忠実に日本へ持って来たって、いまの目から見たらずいぶん不完全なものだね。杉先生は、いずれにしろ主力を人口調査に置いた。これははっきりしているね。

ぼくは、大隈さんが早稲田をつくらせて、あそこで統計というものがあまり珍重されていなかった、というのがどうも解せないんだね。大隈さんという人は、さっきもいったように、本当の意味で統計のために統計院をつくらせたかどうの怪しいわけで、少なくとも一つの大きな目的は、有能な官吏を養成するというんだから、統計についてあまり熱心でないともいえるかもしれないけれども、しかし、とにかく統計の総元締めだったんだから、それが大学をつくらせて、どうもあそこの学校で必ずしも統計の講義が盛んに行われたというわけではないわね。

安川 先生と時代は一緒だと思っんですけども、北澤新次郎さんという方、その方の先生というとはどんな方かご存じですか。

寺尾 さあ、わからぬね。

安川 先生から見るとずっと上ですね。

寺尾 北澤さんはずっと上。東京経済専門学校の学長をやったでしょう。

安川 そうでしたね。もとの大倉高商、東京経済大学ですね。

やはりごく最近まで来ると、藤本幸太郎先生なんかは相当古いということになるのですか。横山雅男先生と、その下あたりは藤本さんあたりまで来ちゃうのですか。

寺尾 横山さんと藤本さんは、大変仲がよかったらしい。

横山さんの次の統計学会の会長だよ、確か藤本さんが。  
そのころのことになると、もう森田（優三）君が直接始  
終教わって。

守川 門下生ですからね。

寺尾 門下生で合っているんだよ。横山さんという人は  
会長として非常にわがままだったんだよ。それで、自分  
のいいたいことだけを雑誌に載せるんだな。これでは非常  
に困ったということも、森田君がいつていますが、それ  
を見ると、だんだん統計を離れちゃっているんだ。あの  
人がどこかに旅行した旅行記ばかりを、例の「統計学雑  
誌」に載せるのです。統計学については、若いうちは非  
常に熱心におもしろい議論を盛んにやっていた人だけ  
ども、だんだん晩年になるに従って、それがなくなっ  
ちゃって、勝手に「私」の雑誌みたいにしてしまったとい  
うことを、森田君がいつていたんだよ。

ところが、それじゃいかぬというので、後で急に、方  
針をもとに戻そう、学術雑誌にしようというので、みん  
な努力したわけだ。ところが、そうすると、途端に購読  
者が減っちゃった。というのは、おもしろ過ぎるとても  
ダメだというので購読をやめた人が多くて、その点も困  
ったと森田君がいつているけれどもね。

横山先生は、ちょうど私たちの教わったころのあの講  
義のようなことを、雑誌に書いていたんだね。盛んに旅  
行をして、その風土記を書いているんだよ。統計とは関  
係ないんだ。ただおもしろい読み物になっちゃっている。

守川 そういう名前でお伺いしたいのは、福本福三とい  
う方がおられますね。ミルスの何かの統計を翻訳した方  
ですが。

寺尾 いましたね。あれはどうしたかな。

安川 森数樹さんは……？

寺尾 あれは一番まともな統計学者だったろうね。数理統計学。あれは数学者だからね。

安川 この間図書館にあった、例のマイエットさんのことが書いてある小論文ですが、あれはご参考になりましたか。私は目を通さないうちに先生のところにお送りしたものですから。

寺尾 ええ、ありがとう。ただ、塾のことは何もわからないね。そのほかのことが非常に詳しく書いてある。お雇い外人としての業績、もう少しああいう人のことを塾として調べてみたらいいと思うんだがね。どれを読んでも、この連中が塾で講義していながら、そのことには全然触れてないのが多いんですよ。全然触れてない。大抵のものに、慶応にいたということが書いてない。

安川 そうすると、福沢先生は招きはしたけれども、あまり力を入れていなかったということですかね。

寺尾 それは配当図を見ると、理財科の場合の統計学は、初めは週2時間だけれども、途中では1時間になっている。またそれが2時間に復活して、最後に1時間になっている。ぼくらのときには1時間しかない。これは、堀江先生が、「あんないかげんな講義に2時間なんてやれねえ」って、ぼくらの前では、きりいったことがある。統計のお話でしょう。ただ学生をおもしろがらせているだけで、本当の学問的な話をしなかった。先生は、世の中を超然としちゃったんだな。

安川 そういうことになってから教わる学生は哀れですね。何にも教えてくれないんだから。(笑)

寺尾 横山先生は、ぼくらが学生のとときに講義聞いたんだよ。落語みたいなことばかりいっている。それで学年の終わりになると、「1年間のおすらいをいたします」という。それで10くらい題を出して、それを説明するわけです。たとえば「大数法則」については、「少量の空気は色なきも天空は常に青々たり。一掬の水は色なきも大海は常に蒼々たり」という定義をやる。

それで10題ぐらいつつと説明して、試験はその中から出す。試験が始まってみると、なるほどその中の5題ぐらいつつが出るんですよ。「右のうちから3題選択」、「ただし、1題につき2行以上にわたるべからず」。たった2行で答案書くんた。(笑) だから痛快なんだ。試験の用紙を配るでしょう。途中まで配ると、もう前のやつは出しているんだ。だから後のやつは大変だよ。ぼんやり待っていられないから、「早くよこせ、早くよこせ」とわあわあ騒いで、最後に配り終わったときにはほとんどがらがらになっちゃう。(笑) それは10分ぐらいつつ済んじゃうんだから、大変な試験だった。

横山さんは昭和7年に学校をおやめになった。というのは、私が帰ってきたから、先生はやめて、その後義士会の会長になられた。

安川 何か、ゆかりのある方なんですか。

寺尾 そういふ人だったんだな。とにかく古武士みたいな人だ。一面大変謹厳なんだけれども、一面落語家みたいなところがあつた。初めのうちのスタケスタック社の時代の横山さんというのは、大変な学者だよ。

安川 そうらしいですね。散見するものを見ましても、なかなか重きをなした存在だったようですよ。

寺尾 藤澤さんとの論争なんかも、実に整然としている。リッパなものだ。だんだん超然としてきちゃったんだな。おもしろい人だった。ぼくは、あの人がそんなに偉い人だったら、もっと学生のころ教えを受ければよかったんだろうけれども、学生が全然先生を相手にしないんだ。教室に行くのは、寄席に行くつもりで行くんだから。

安川 先生の習われたころは、お幾つぐらいだったんですか、お年は。

寺尾 横山さんは大変年をとっておられた。80幾つで七くなられたんだから。

安川 1862年に生まれ、昭和18年に七くなられたんですね。

寺尾 ええ。18年というと、20年が1945年だから……。

安川 七くなられたのは81歳ですね。昔の81というと大変だ。

寺尾 だから、学校におられたときだ、で相当の年ではあったな。

安川 先生が教わったのは大正10年くらいですか。

寺尾 10年くらいだ。

安川 1920年くらいですか、大体60くらいですね。昔の60は、堀江先生だっておで七くなくても、あんまりリッパなおじいさんだったから。

寺尾 ぼくら、本当に大変なおじいさんだと思っていた。ひげを生やして、和服を着て。洋服姿は見たことない。

寺尾 福田先生は「統計学雑誌」にずいぶん書いています。

安川 「統計集誌」という雑誌もありますね。



寺尾 「統計集誌」は協会の方の雑誌で、「統計学雑誌」というのがバスタケスタッフ社、したがって、その後の統計学社の機関誌。何かややこしいんだ。ぼくなんかわからなくなっちゃう。

福田先生は、物価指数について盛んに書いていますよ。書いているというか、報告をしているんだ。したがって、それが論文になっている。

安川 きょうは時間もあれですから、この辺で打ち切りますけれども、お調べいただいた話はひとまず打ち切って、今度はひとつ気楽な思い出的なもの、統計学会ができたときは留学中だったというのですけれども、その前後の関係ですね。行く前がどんな状況か、帰ってきてからどんなぐあいだったか、というようなこともお話しただけだと、みんなが忘れてることなんかも出てくるということが、あるんじゃないかと思うのです。何か、いい水を向けるような話題があればいいのですが……。

(第2回了)

日本における統計学の発展

第 二 卷

話 し 手 寺 尾 琢 磨  
聞 き 手 安 川 正 彬

1980年11月17日(月)

慶応義塾大学にて

守川 きょうは11月17日（月曜日）、前回10日、1週間前に寺尾先生からお話を伺いましたけれども、今回は、福田徳三先生の統計学にまつわるお話を伺いたいと思います。

寺尾 この前お話ししましたとおり、塾に大学部ができてから、マイエット先生、岡松径さん、呉文聡さん、横山雅男さん、この4人の方が塾で統計の講義をした。しかし、実際にどういう講義をされたかということはいまははっきりしていません。

それで、どうも統計学の講義があまり重要視されなかったであろうと思われる証拠は、与えられている時間が非常に少ないんです。初めは2時間のはずだったのに、だんだんそれが1時間に減ってしまったり、また2時間に1度返ったり、また1時間になったり、どうもそんなように繰り返しているらしいんです。1つの科目が1週間に1時間というのは非常に冷遇であって、大事な科目でそんなことはないはずなんですから、あまり統計の講義というものは重きを置かれなかったんだらうと思われるわけです。

いままで見てきたとおり、これらの先生方というのはいずれもその当時としては超一流の先生方だから、本当にまじめに講義をされたらりっぱなものだったと思うんですけれども、どうもそこがはっきりしないし、最後に実際に私がついた横山先生なんかも、講義というものはいささか投げやりになってしまって、まるで遊び半分に学校へ来られたようだった。統計学の話というものはまぶなかつた。統計のお話というの、何か落語みたいなこ

とになってしまつて、したがつて、私も統計学の講義を聞いたとは思わなかつた。それで終わつてしまつたわけです。

その時代に、塾の先生方の中で統計に一番関係があつたと思われるのは、福田徳三先生なんです。福田先生は一橋の出身で、初め一橋に奉職されたわけですが、一橋から明治31年にドイツへ留学して、33年に歸つてこられたんです。ここではご承知のとおり、ビュッヒャーだとか、歴史派の親方のブレンターノに師事されて、特に、ブレンターノには大変のわいばられたといふか、一緒に本を書いている。1つは「労働経済論」、もう1つは「日本経済史論」、この2つの本なんかは、ブレンターノとの共著という形になつてゐるくらいで、短い留学期間に大変な業績を上げた方です。

福田先生が歸つてこられたから、もちろん一橋へ歸つたんですが、先生は留学中に教授に任命されている。歸つてきてすぐに教師として教壇に立つたんですが、この人は大変けんか早い人で、一橋でも、たちまち同僚とけんかをして飛び出してしまふ。飛び出して、塾へ移つて塾の先生になられた。

安川 塾に移つてこられたのは、いつなんですか。

寺尾 明治38年に塾へ来られて、大正7年まで13年間塾にいたんです。かなり長いんです。そのときに非常に立派な仕事をなすつたわけで、そのときに受け持った講座は、「経済原論」と「経済史」です。

小泉先生が福田先生の講義を聞きたい一心で政治科へ入学したということは、これはもう皆さんご承知のとおりで、理財科では「原論」の講義をしなかつたらしい。

政治科の方で「原論」の講義をしたものだから、小泉先生はそれを聞きたくて政治科の学生になった。

安川 いままでいう経済学部、商学部のような分け方が、当時は、経済学部に相当するのはむしろ政治科で、理財科というのはむしろ商業的なことをやったとか、そういうことでもあるんですか。

寺尾 そんなことは全然ない。

安川 だったら、当然理財科でも「経済原論」の講義をやってもよさそうですね。

寺尾 それは専任者がちゃんといままでいたですからね。初めは例の名取和作さん。名取さんは、間もなく自分を福田さんと比べてみると、どうも少し及ばぬわというので、一種のインフェリオリティー・コンプレックスのようなものを持ったらしくて、学校をやめちゃうんですよ。むしろ自分は実業界に入りたい方がいいたろうというので、実業界に入っちゃった。理財科の方が先生がそろっていたものだから、おそらく政治科の方へ福田さんは回ったんじゃないかと思われるんです。

そこで、この時代は、実際に社会的な活動を非常にやったわけですね。労働問題に関するいろいろな学外活動を非常に盛んに始めたころです。

話は飛ぶけれども、私が塾へ残って、小泉先生について数理経済学、特にジェーボンズの研究をやっていたわけだけれども、昭和3年だったか、あのときの学部長は気賀さんだったが、突如、学部長に呼ばれて、教授会で君を留学させることに決まった、科目は統計学だと、いきなりふよっといわれた。留学はうれしいけれども、統

計学はぼくは全然知らぬですよ、何もやったことではないですといったら、そのときに向こうがいうのは、教授会でもみんなそのことを問題にしたら、あれは数理経済学をやっているんだから大丈夫だろう、こういう理由だ。まことにこれはいいかげんな話で、中山さんの場合と同じなんです。

一橋の中山伊知郎さんが数理経済学をやっていたところが、突如、留学を命ぜられた。ひょっと見たら、「統計学及び経済学研究のため」、こういうふう書いてあったんで、実際びっくりした。その理由を聞いてみたら、おまえは数理経済学をやっているんだから、数学は共通だからいいだろう、こういった。それで、「まことにでたらめな話だね」ということをぼくにいったんですが、まことにそれと同じなんです。一橋もでたらめだけれども、塾もでたらめだった。

そのときに、ぼくもしばらく考えたけれども、統計学というものも、自分は横山さんの講義しか聞かないけれども、どうもあんなものじゃなさそうな気がして、もう少し学問的な何かがあるんだろう。それまで塾に、とにかく専任の先生というのではないですから、どうしても塾として専任を置かなくちゃならぬという理由もあるから、ぜひやれ、こういう話だった。ことに小泉先生にも盛んにいわれるから、どうも先生とけんかするわけにもいかぬ。それで、じゃ、やってみましょうということになったわけだ。

そのときに、小泉先生が、福田先生に一度会え、福田先生は大変な統計学の大家のはずだ、自分は統計学のことについては何も知らぬけれども、自分の先生の福田先

生は、統計学については詳しいはずだ。というのは、あのときの統計協会、東京統計協会といったかな、その有かなメンバーで、たびたびあそこで講演をしているんだ。そういう記録は、あそこ例の「統計学雑誌」に論文がみんな載っていて、自分も実は読んだことがあるんで、大変統計には熱心な方だから、ひとつ福田先生に会え、こういうお話なんです。

ところが、福田先生はそのころ体が悪くて、山中湖の山中ホテルで静養されていたんです。それで、昭和4年の夏、先生の紹介状を持って、そこへのこのこ出かけたわけだ。それで、おそるおそる伺ったわけだ。もっともそれまでに先生にお目にかかったことはある。お目にかかったというか、先生の講演を聞いたりなんかはしていたから、こちらは知っていたわけだ。

先生、ちょうど退屈しているところへ行ったものだから、向こうも快く会ってくださって、紹介状を読んで、「何だおまえ、小泉の弟子ならオレの孫弟子じゃないか」と、ことには、ジェーボンスをやっていると書いてあって、ジェーボンスについては大変関心の深い人だものだから、そんなことが話題になって、ずいぶん長いこと、1時間半ぐらいかな、いろんなことを大きな声で話をしてくださったんです。

安川 体は小さい方だったらしいですね。

寺尾 声の大きな……。

ぼくが何も統計学を知らぬといったものだから、統計学というのは非常に大事な学問で、特にこれからの経済学は必ず統計学と関係が密接になるんだ、いま2つが離れ離れになっているけれども、あれは必ずもっと関係が

深くなるんで大事なもののだから、これはぜひやらなくちゃならぬということ。それから、おまえはジェーボンスをやっているといっただが、ジェーボンスにはいろんな面があるんで、おまえはその中のこればかりしかやっていないんだ。ジェーボンスというのは抽象的な理論の大家であると同時に、あれはあのころ有数の統計学者だといって、恐ろしく先生は、統計学者としてのジェーボンスを買っていた。これは後で論文を読んでわかったんだけど、大変ジェーボンスを買っているんです。

その話を大分やらせて、おまえ、ジェーボンスを研究するというのなら、そっちの方までやらなければ、ジェーボンスを研究したとはいえないんじゃないか、たった一面しかのぞかないで、ジェーボンスをやったなんて厚かましいというふうなお小言を食らって、とにかく大変激励された。

そのときに、初めて統計学と経済学の結びつきが必要だという認識で、中山さんを「統計学及び経済学研究のため」という題でベルリンへ留学させたんだ。

実は、ぼくはどこへ行ったらいいかよくわからなかったものだから、それも小泉先生に相談したら、「自分にはよくわからぬから、それもひとつ福田先生のご意見を伺え」ということだったから、おそるおそるそれも申し上げたら、ボルトケヴィッツ先生のことを知っているんだ。自分も新しい学界の潮流はよく知らぬけれども、とにかくベルリン大学のボルトケヴィッツといえば大変な学者だから、中山もそこへやった。君も行くのならそこへでも一度行って、何なりそこでアドバイスを受けて決めればいいじゃないかといって、簡単な紹介状を書いてくだ



さったんです。小泉先生も書いてくださったんですがね。安川先生は、その段階ではすでに中山先生はご存じだったんですか。

寺尾 名前は充分聞こえていたんだけど、あの人は昭和2年に留学したんです。それで、私が福田先生を山中湖へ訪ねて行ってしゃべっているときあたりに帰ってきた。入ればなんですか。「もう中山は帰ってきているかもしれぬ、会っていき、会っていったらいいだろう」というようなことだったんです。

もちろん、ぼくはまだ中山さんに会ったことはなかったから、会ってみただけだったんだけど、ご承知のとおり、あのころぼくは、マルサスの翻訳をとにかく出発前までにやってしまわなくちゃならないんで、その最後の段階だったんです。校正に追われて、夜寝る時間もろくにないんです。あんな忙しいことはなかった。1度中山さんのところに行ってみようかなとは始終思っていたが、全然暇がなくて、とうとうその秋に出発しちゃったわけです。

向こうへ行って、とにかくボルトケヴィッツ先生のところに行ったら、大変な紹介状を持っているからだろう、先生も快く会ってくださった。ところが、先生も病気で講義はしてない。

安川 翌年亡くなられたんですものね。

寺尾 その翌年、亡くなられちゃったんです。

講義は休んで、大学の講義はシャルロッテ・ローレンズという女の弟子に任せて、自分はときどき研究室へやってくるわけです。そこへ弟子たちがみんな集まって、弟子が報告したりなんかするのを聞いたりしていたこと

もあった。

それで、向こうでどうせみんなはむずかしい講義をやっているんだ、こっちは初めから、私は何も知らぬですからと、ちゃんと説明してある。「その勉強については、ローレンズさんにすべてやってもらえ、いっでも大学へ来たら、この部屋に遠慮なくやってきてよろしい」というので、入室が許されたものだから、ベルリン大学へ行くともまず先生の部屋に行っ、先生がおられればあいさつをして、いなくなったらローレンズさんやなんかいるものだから、結局ローレンズさんに指導を受けたわけです。こっちは、ボルトケヴィッツ先生なんかとは段違いで、何を問題にしているのか、それもまるでわからない。いま考えてみれば、例の安定人口のことをやっていたわけだ。

安川 あれは特殊な理論ですからね。

寺尾 そうそう。要するに、何か大学者の前へ幼稚園の生徒が行ったようなもので、こっちは啞然として横でながめていたわけです。

ローレンズさんというのは大変親切な人で、まだ若くて、年はぼくと同じくらいだったと思う。非常な美人で、すんなりした体で、学校の先生という面影が全然ないんだ、おしゃれてね。だから、こっちも大いに励んだ。本当にあの先生に、ぼくは統計学のイロハから教わったわけだ。

安川 いまから先生が振り返られても、その当時の向こうのテキストというのは、やはりリッパなものだったんですか。そうでもないんですか。

寺尾 ローレンズさんが、自分の講義をプリントのよう

なものにして、それを学生に渡してやっていたんです。これはごく普通であれじゃないかな。とにかく統計学の歴史から始まって、非常に平凡なあれだったけれども。宇川　そこで先生が直接その先生に教わったということと、やがて寺尾先生ご自身が「統計学理論」という本をお書きになるわけですが、文献上の問題からいって、その関連という点はいかがなんでしょうか。

寺尾　あれはないでしょう。ぼくの書いたあの本なんていうのは、むしろフランスにいるときに、統計学に関するいろいろな論文を読んだものをまとめたものじゃないかな。何か薄い本で、そのころおもしろい問題をたくさん扱った叢書がたくさんあったんですよ。それが大変おもしろくて、これはもちろん統計だけじゃない、ありとあらゆる問題、たとえば偶然に関する理論だとか、おもしろいけれども、非常におもしろいのがたくさんあって、それをぼくが夢中になって読んでんです。

あれはずっと後になってからで、初めは全然わからなかった。ベルリンにいるときは、一通り統計を勉強するので夢中だった。だから、ベルリンで勉強したこととあの本とは、何も関係ないです。

あそこにどのくらいいたか。1年ぐらいローレンズさんに教わったでしょう。向こうに行ったときに、中山さんのことを聞いてみたら、しばらくはここにいたけれども、ボンの方に行っちゃった。後で聞いたら、シュンペーターのところに行っていたんです。

ただ、ぼくがベルリンにいるときに、一橋の杉本栄一君とちょうど一緒だった。ちょうど藤林圭三君と同じ下宿で暮らしていたものだから、ぼくが始終そこへ行くわ

けだ。

大学に行くのに行き道なもので、藤林を誘うわけです。2人とも寝坊で、向こうの女中が困っていたんだ。2人が起きて飯を食ってしまわないと、部屋が片づけられないでしょう。そうしないと、自分が外へ行けないんだよ。やきもきしているところにぼくが行くわけだ。だから、ぼくが行くと喜んで、「また起こしてください、起こしてください」ってやるんだ。それで2人をたたき起こして、一緒に学校へ行ったわけだ。

ぼくと藤林はベルリン大学のオへ行くとはいけども、杉本君はワーゲマンについていた。ワーゲマンは、あのころ大学付属の研究機関で、ベルリン景気研究所という有名なのがあって、その所長なんです。大学の方で講義するんじゃないんです。杉本君はそっちに行っていたわけだ。もっとも統計学とは大変縁のあるあれなものだから、「1度ワーゲマン先生に会ってみろ」と杉本君にいわれて、杉本君が連れていってくれた。「景気研究所の様子もひとつごらんなさいよ」なんていって見学したりした。そしてワーゲマン先生にも会った。

ボルトケヴィッツ先生は雲の上のような感じの先生だったけれども、ワーゲマンというのは本当に好々爺で、愛想がよくておもしろかった。2〜3週間は続けて毎日行ったかな。それで、ぼくはやっていることに興味を持ち、帰ってきてから、後で、景気変動のあれを学会雑誌に書いたことがあるんだ。実物をそこで見たものだから、そこで見たことをあそこで書いたんだ。

そんなことをして1年ぐらいやっている間に、ボルトケヴィッツ先生がなくなっちゃった。大体一通りの講義

は聞いてちゃっていて、もう少し違った講義を聞きたかったものだから、ローレンズさんに相談したら、「あなたはフランス語が読めるなら、パリ大学へひとっ行ってごらんなさい、あそこにアフタリヨンとマルシュなんという、自分も知っている大変いい先生がいるから」というので、パリへ移っちゃったんです。後はずっと、主にアフタリヨンさんのところにいたんです。

安川 その当時、英、独、仏の中で、統計学の学問の中心というのはどこにあったんですか。アメリカというところ……。

手尾 アメリカはまだまだ、そのころじゃ何もない。みんなヨーロッパに勉強に来ていた時代だから。

その3国でいったら、後で考えてみたら、むしろイギリスじゃないか、ボーレーさんなんかいたから。ただ、数学的な問題になるとフランスなんだ。マルシュというのが親方なんだ。ぼくは自分にはわからなくても、ゼミ生なんかものにくっついてみようと思ってマルシュさんのところに行ったら、とにかくそこに一緒に来てやっごらんという。

マルシュさんとアフタリヨンと、まるで隣り合ったような部屋なんで、よく両先生にあれしたんだけど、フランスじゃマルシュというのは大体親方だったんですね。それは世界的な数理統計学の大家だったんだ。時間さえあればイギリスへ行って、本当はボーレーあたりのあれを聞けばよかったんだけど、2年ちょっとじゃとでもそんな暇ないし。

安川 ノつには手尾先生の時代というのは、ドイツ、フランスに学ぶというのが留学のノつのパターンというん

ですか、その少し前の方々は、イギリスへ行かれたよう  
ですけれども、みんなドイツみたいですね。ドイツもイ  
ンフレがあったりするんだけれども、大戦後の生活上の  
こともあったのかもしれないね。

寺尾 あのころは、ドイツとしては一番学者のやろって  
いた時代でしょう。後ではナチスに追われて、みんない  
なくなっちゃったけれども、あのころは、とにかくどっ  
ち向いても偉い先生が転がっていましたよ。やはり、日  
本とドイツとの関係が一番なごやかだった時代で  
しょう。日本人が一番居心地もよかったんだね。全然ほ  
かの国の連中は相手にしなくても、向こうも優遇してく  
れるんだよ。ほかの国の連中なんて、大学の研究室にな  
かなか入れなかった。

安川 第一次大戦の後で、日本が青島に立場上攻撃はし  
たんでしようけれども、日本に来た捕虜を優遇したという  
ようなことから、やはり感情的に好意的に思っている  
ということがあるんでしょうか。別の側面から、どっかう  
マが合うとかあるんですかね。

寺尾 ぼくがドイツへ行った一つの理由は、ぼくのおや  
じがやはり向こうで勉強したというあれがあるんだけど、  
おやじは大変ドイツが好きで、昔の医者というのはドイ  
ツ以外に別に勉強するところはなかったわけですよ。おや  
じはイェナ大学に行っていたんです。ドイツが非常にお  
気に召していたらしくて、それでうちのおふくろに始終  
話していたわけだろう。「おまえさん行くなら、おやじさ  
んの行ったところへでも行ってごらん」なんてことをい  
った。

ぼくも初めから、留学するならドイツへ行ってみたい

なと思っていたところへ、ちょうど福田先生が、とにかくベルリンへ行っただけから、その後は考えなさいといわれたものだから、渡りに船とばかり、そのまま行っちゃったわけだ。

福田先生のことだけけれども、さて、私が帰ってきたときには、先生はその前年、昭和5年に亡くなられてしまっていた。むしろその後、いろいろ福田先生のことを勉強したわけですね。そうすると、統計学については大変な業績があるんです。

福田先生については、中山先生が「福田博士と統計学」という論文を書いたんです。これは「統計学集誌」、統計協会の機関誌に、昭和5年、福田先生がなくなった年に、中山さんが、追悼文「福田博士と統計学」というので、協会と統計学の関係を特に詳しく書いてあるんです。

福田先生は、協会の評議員をずいぶん長いこと、大正6年から昭和4年まで、亡くなられる前年まで務めておられるんです。そこで月次講話会という会があって、先生はたびたび講演をしているんです。研究報告をやっているんです。

これは主に経済統計ですが、この中で特に物価指数の話がたびたび取り上げられている。大正8年に「物価指数に就て」という題で、講演しているんです。これは大変おもしろい論文で、先生が初めに、「どうも私がいったのとこれは題が違う、私はこんな題は言ってないんだ、私は『物価指数の研究について話をする』といったのに、ここでは『物価指数に就て』、これは違うんだ、私は物価指数に至るプロセスをいおうとしているのに、『物価指数』

といえ、もうでき上がったものであつて、私はそこへ行くプロセスを調べようと思つてゐるんです」なんてことから始まつて、これはかなり長い講演なんです。

この中で、ジェーボンスを非常にほめちやつた。3人の名前を挙げた、トゥックとロジャース、ジェーボンス。一番初めにとにかく物価指数を取り上げたのはトゥックだ。それを一応完成させたのがロジャースだ。ところがこれを本当の学問的なものにしたのがジェーボンスだ。だから、ジェーボンスこそが本当の統計学の元祖だといふふうなことをいつてゐるんですよ。

なるほど、先生にそんなことがあるものだから、私にジェーボンスの研究をしろと盛んにいわれたんだと思うけれども、私は帰つてきてから後で、こんなことは知つたわけですよ。

福田先生は、物価指数や例の労働問題に首を突っ込んでいたものだから、大正13年に、震災による失業問題を大変重要視したらしくて、「失業問題の数的考察」という論文を、「統計学雑誌」へ書いてゐるんです。これは協会の雑誌じゃなくて、例の統計学社の方です。その中で、地震保険というものを提唱してゐる。

とにかく福田先生というのは、統計の講義はちつともしたとは思えないけれども、統計については大変な執着を持つていた人で、またそういう研究業績も十分にありました。もし私が入学したときに先生がおられれば、そんなことも教つたのかもしれないけれども、ちょうど先生は大正7年に塾をやめて、またもとの一橋に帰つてしまわれた。私が入学したのは大正8年で、翌年ですから、もう先生には直接教えを受ける機会はなかつた。



小泉先生が福田先生の弟子だったといっても、実は、小泉先生は自分でもいっているとおり、統計については全然話を聞いたこともなかった。小泉先生自身も、統計には興味はなかったのですから、小泉先生を通じて、統計学者としての福田先生を知ることとは、とてもできなかったわけです。

安川 途中で質問しちゃいますけれども、先生は現在でも、ジェーボンスという人は、やはり統計学者として高いものを持っておられると思われますか。

寺尾 思いますね。だって、この人の発明にかかるといふことがたくさんあるんだ。一番おもしろいのは、景気予測のようなことを商売にしたのが、この人が初めてなんです。それから、半対数図表をつくったのはジェーボンスなんです。それから、平均において、幾何平均というものが大変重要なものだということも初めては、きりさせたのもジェーボンスです。

安川 物価指数論というのは、一般的にいっている中にはジェーボンスはあまり出てきませんね。とにかくフィッシャーとかラスパイレスとかは出てきますが……。

寺尾 あ那个时候は幾何級数なんというものが常識になっちゃっているから、初めてそれを取り入れたというような意味で、もう少しさかのぼると出てくるわけなんだ。

安川 統計学の上での歴史上の人物ということなんですわね。

寺尾 歴史上の人物だね。そのことをぼくはかつて「統計学者としてのジェーボンス」という題で学会雑誌に書いたことがある。それは福田先生に初めに示唆を与えられて、それ以来頭につかえていたわけ。それでジェーボ

ンズを、特にその見地から研究していた。

安川 いまのお話の中での震災による失業問題だとか、地震保険ですか。

寺尾 地震保険を真剣に考えるというようなことが、その論文の中に書いてありますよ。大正13年です。

安川 震災の後だから、大きな関心があったんでしょね。

福田先生は、亡くなられたのはお幾つぐらいなんですか。山田雄三先生が最後のお弟子さんのように……。山田先生は昭和5年のご卒業か何かだったと思いますけれども。

寺尾 先生は、亡くなったのは昭和5年だけけれども。

安川 それまではずっと一橋で授業はされておったんですか。

寺尾 していた。何歳だったかな。

安川 ちょっと調べれば、「経済学辞典」とか、ああいうのに出ていますから。

寺尾 これもあまり大した年じゃないですよ。

安川 寿命のまだそんなに長くない時代でしょうから。

寺尾 さて、それからもう一つ、塾の統計学については例のコンピュータの問題があるわけです。これは非常に早かったわけです。

とにかくぼくが昭和7年に帰ってきて、塾で初めて専任の統計学の先生ができたわけだ。だけど、間もなく戦争になって、後は君たちのご承知のとおりな世の中になってしまったわけで、特に統計の研究というものは、大変妨げられたわけだ。というのは、資料が全然入らない。

みんな重要秘密事項になっちゃって、必要な統計自体が入らないものだから。

これが熱心に研究されるようになったのは、何と云って戦後ですわね。すべての学問が、戦争後復活したけれども、特に統計学というものは、急にあのころから研究が盛んになったわけだ。

それはノッパは、戦争の最中にアメリカで新しい方法がどんどん開発され、それが一時にどっと日本へ流れ込んだわけで、ただ、そのときに日本では、理論はすぐにわかったけれども、肝心の計算の問題でみんなお手上げになってしまった。向こうじゃコンピュータというものが威力を発揮し始めていたのに、日本にはまだコンピュータが、少なくとも大学じゃ使えなかった。コンピュータをどうかして入れたいなというのが、私と藤林と二人の意見だったわけだ。

ご承知のとおり、藤林が昭和25年に産業研究所をつくらうと言い出して、藤林と河田、この二人が中心になって大変苦労して、産業研究所がとにかく誕生したわけだ。私も藤林とはご承知のとおり仲よしだし、自分の立場からいっても、ゼムコンピュータのようなものは入れたい。ちょうどそのころ、私が産研の副所長を引き受けてやった。一緒に始終話をして、どうかして入れたいものだといっていた。それで、どうすればコンピュータが手に入るだろうといろいろ考えたんです。初めに大学の方へ話してみたら、「とてもそんな高いものは買えやせぬ、カネがないくらダメだ、おまえたちカネをどこかで工面しろ」という、けんもほろろなごあいさつで、二人で、どうにかならぬものかと考えていた。

ちょうどそのときに、文部省に、外国の研究用の資材購入の委員会があって、それは半額を政府が持つから、あとの半額はこちらで工面しろということで、ぼくがその委員をやっていた。だから、ひょっと考えて、それに申し込めばとにかく値段は半分になる。

IBMに当たってみたら、これは大変簡単に、教育のために何か援助するのはIBMの本来の使命だ、ただというわけにもいくまいけれども、できるだけ安い値段で提供できるようにする、こういう話になった。だんだん交渉してみたら、結局6割引き、だから4割だけ払えばいい。これを割引きとはいわない、寄付というんだ。6割に相当する額を寄付する。だから、4割だけのカネを払ってくれればいいという。

ところが、文部省あたりの払ってくれるお金というのは、輸入した機械について払うんであって、コンピュータを入れるための入れ物が非常にお金がかかるわけだ。あそこへつくったあれがそれなんだけれども、あのときに計算してみると、本体の価格が約1億円、設備費が、5000万、1億5000万円要るわけだ。いまから20年も前の1億5000万というのは大変なカネで、どうしたもんだろうといって、2人で始終頭を痛めていたんだ。

思い切って萩原吉太郎君のところへ持ち込んだわけだ。ちょうど時期がよかったんだね。そのときは、萩原君の還暦の年なんだ。それで、その記念にそのくらいなことをオレがやってもいい。初めは、萩原君に相談をしてカネを方々から集めようと思った。ところが、なに、そのくらいオレが出すと、いやに気前よく引き受けてくれた。それで急にこっちも気が強くなって、それから政府との

交渉が始まるわけです。

ところが、ちょうどぐあいが悪いことに、コンピュータの国産化ということが問題になって、アメリカから安い機械が入ってこれたんじゃとでもダメだ、特に、IBMが実際には6割引きで提供するなんというのほとんどでもないことだ、そんなものは輸入を許可せぬ、こういうことを言い出した。

そんなことをいっているときに、実は藤林は死んじゃったんだ。37年に死んじゃっているから、交渉している真ん中に死んでしまった。しようがないから、後ではぼくが中心になったわけで、ぼくと萩原とたびたび会って、どうしたものだろうとやった。

政府が許可しないものだから、1年たっても解決しない。あるとき、とうとう業を煮やして、萩原と通産大臣に会って事情を説明したんです。そうしたら、萩原君のご威光か、比較的すらすらと許してくれて、それでコンピュータが入ったんです。

これは日本の大学では2番目です。もうひとつ前に、神戸の甲南がIBMから6割引きで入れているんです。それが政府にわかったものだから、許可しなくなっちゃった。同じ条件であんなことされちゃ困る。それで、そのときに塾へ入れるについて、IBMが一札とられているんだ。これを限りに、そういうべらぼうな安い値段では大学に入れないということを一札とられて、それで入れてくれた。許してくれたわけだ。

通産省から許可がおりたのが、昭和38年の2月なんです。そしてその次の月、3月の26日に塾へそれが到着した。さっきいったように、藤林はすでに37年に死んでし

まっているから、ついに機械が入ったのは知らなかった。残念なことをした。これも萩原君のえらい好意でこういうことができたわけで、珍しいことだと思っんです。

萩原君は、ご承知のとおり、学生時代に大変優秀なやつで、学校としては助手にして残して、将来教授にするつもりだったんだけど、本人が、自分は学校の先生はいやだといって社会に飛び出した。それがいつでも頭角の一角にひっかかっていた。それで最近、自分の履歴書を書いたわけだ。「財界札幌」という雑誌があるんです。それにいままで書いていたものを土台にして書き直したものの、エンラージしたものらしいんだけど、「財界札幌」へ書いているときに、私が、君は自分のことをすべからずいやに遠慮して書いているけれども、コンピュータを寄付したくらいの報告を少しは書いてもいいんじゃないかというふうなことをいってやった。それしたら、ぼくの手紙をそのまま、「寺尾さんからこんな手紙が来た」なんてことだけが書いてあった。ぼくがいったのは、本人は学校の先生になるところだった、始終頭のどこかにこびりついていてるらしいけれども、しかし結果においては、このコンピュータのおかげで塾の学問が——統計学とは限らない、全般的に飛躍的に進歩したんだ。学校に残って先生になったよりも、われわれにはもっと大きな貢献をしたわけだからというようなことを書いてある。おそらく今度出る本の中にそんなことが出るんじゃないかと思うんだけど、実際、私そう思っているんですよ。あれは大変な大きな恩恵を受けたわけですよ。ほかの学校には、なかなかそういうあれはないと思うんだ。

安川 慶応義塾に残した美談ですね、これは。

寺尾 なかなか容易にできるこ、ちやないですね。少し安くしてくれたことは事実なんです。文部省が何千万か寄こしたんだけど、しかし、こちらのあれは全然やってくれない。設備については割引はないんだから。それはみんな萩原君がしょ、ちやったんです。だから、相当の金額だったろうと思うね。初めの約束のあれで計算してみると、機械に、6割引きでも結局4000万、片方の設備が、全部これを萩原君がもし引き受けたとすれば、約5000万じゃないかと思うんだけど、そこまではさすがにあれしなかつたみたい。それは塾がやっぱり持たらしい。それでも6000万ぐらいは萩原君がしょったんじゃないかと思うんだがね。ぼくも、幾ら出したなんてことまでは聞かなかつたけれども、大変な金額だ。

安川 こういうものに対する寄付行為には、税金のことは別に心配なかつた……？

寺尾 それもこ、ちは聞かなかつた。どうしたかね、あれは。

安川 こういうお話というのは、大概税金のことはあまり語りませんけれども、免税というわけじゃないと思いますから、寄付に対する行為ということ……。

寺尾 そういふわけで、コンピュータを入れたのは、私学としては2番目です。非常に早かつたわけです。昭和38年だからね。

安川 それでは、寺尾先生から伺うお話は、今回で一匹切りつけることにいたします。どうもありがとうございました。